

三 田 市

下 相 野 窯 址

近畿自動車道舞鶴線関係埋蔵文化財調査報告書XVII

—— 近世丹波焼の調査 ——

1992年3月

兵庫県教育委員会

三 田 市

下 相 野 窯 址

—— 近世丹波焼の調査 ——

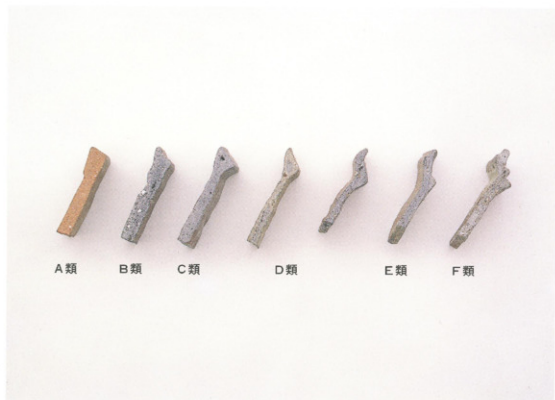


1992年 3月

兵庫県教育委員会



調査地区 全景(東から)



挿針断面形態分類



播鉢(大・小)



焼台

例 言

1. 本書は、兵庫県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて、確認調査（昭和62年8月25日～2月2日）及び本調査（昭和62年10月1日～11月14日）を実施した下相野窯址（三田市下相野所在）の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は、大平 茂が行い、松本 睦が補佐をした。
3. 遺構実測は、調査参加者全員が行い、遺構写真は調査員が撮影した。遺物実測、遺構トレース・遺物トレースは嘱託員が行った。遺物写真は榊サンスタジオに委託したが、描録断面写真のみ大平が撮影している。
4. 本書に使用した方位は磁北であり、レベルは海拔標高である。
5. 遺物の記載番号は、本文・挿図・図版と同一番号にしている。
6. 本報告をもって、兵庫県埋蔵文化財調査年報（昭和60年度）の年代観等概要報告の訂正とする。
7. 本報告にかかる出土遺物及び写真関係等の資料は、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所と兵庫県教育委員会魚住分館にて保管している。
8. 発掘調査にあたり、日本道路公団三田工事事務所、三田市教育委員会及び地元下相野の方々にご協力を頂いた。記して深く感謝するものである。
9. 報告書の作成にあたり、以下の人々に御教示を得ている。記して深謝したい。
市野弘之・稲原昭嘉・岡崎正雄・岸本一郎・高島信之・西井逸男・長谷川真・
二葉 滋・水口富夫・村上泰樹・森内秀造・山下史朗・吉田 昇

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 近畿自動車道舞鶴線に伴う調査	1
第2節 調査に至る経過	1
第3節 調査概要とその組織体制	2
1. 確認調査	2
2. 全面調査	2
3. 整理調査	5
第2章 遺跡をとりまく環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査の記録	11
第1節 遺跡の立地	11
第2節 物原の層序と出土遺物	12
1. 物原の基本堆積土層と出土遺物	12
2. 出土遺物の概要	15
3. 播鉢の形態別分布	64
第3節 検出遺構と出土遺物	73
1. 土壌	73
2. 竪穴状落ち込み	73
第4章 まとめ	75
近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年	

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	3
第2図	グリッド設定図	4
第3図	発掘作業風景	4
第4図	整理作業風景	6
第5図	下相野窯周辺丹波焼窯址分布図	9
第6図	立杭登窯	10
第7図	窯体と物原の位置図	11
第8図	土層断面図	13・14
第9図	掘鉢断面形態分類写真	15
第10図	物原第1層出土遺物(1)	17
第11図	物原第1層出土遺物(2)	18
第12図	物原第1層出土遺物(3)	19
第13図	物原第1層出土遺物(4)	20
第14図	物原第1層出土遺物(5)	21
第15図	物原第2層出土遺物(1)	22
第16図	物原第2層出土遺物(2)	23
第17図	物原第2層出土遺物(3)	24
第18図	物原第2層出土遺物(4)	25
第19図	物原第2層出土遺物(5)	26
第20図	物原第2層出土遺物(6)	27
第21図	物原第3層出土遺物(1)	28
第22図	物原第3層出土遺物(2)	29
第23図	物原第3層出土遺物(3)	30
第24図	物原第3層出土遺物(4)	31
第25図	物原第3層出土遺物(5)	32
第26図	物原第3層出土遺物(6)	33
第27図	物原第3層出土遺物(7)	34
第28図	物原第4層出土遺物(1)	35
第29図	物原第4層出土遺物(2)	36
第30図	物原第4層出土遺物(3)	37

第31図	物原第4層出土遺物(4).....	38
第32図	物原第4層出土遺物(5).....	39
第33図	物原第4層出土遺物(6).....	40
第34図	物原第5層出土遺物(1).....	41
第35図	物原第5層出土遺物(2).....	42
第36図	物原第5層出土遺物(3).....	43
第37図	物原第5層出土遺物(4).....	44
第38図	物原第5層出土遺物(5).....	45
第39図	物原第6層出土遺物(1).....	46
第40図	物原第6層出土遺物(2).....	47
第41図	物原第6層出土遺物(3).....	48
第42図	物原第6層出土遺物(4).....	49
第43図	物原第6層出土遺物(5).....	50
第44図	物原第6層出土遺物(6).....	51
第45図	竪穴状落ち込み・土塙出土遺物.....	52
第46図	物原出土古銭拓本.....	52
第47図	播鉢見込み拓本(1).....	53
第48図	播鉢見込み拓本(2).....	54
第49図	播鉢見込み拓本(3).....	55
第50図	播鉢見込み拓本(4).....	56
第51図	焼台手印拓本(1).....	57
第52図	焼台手印拓本(2).....	58
第53図	焼台手印拓本(3).....	59
第54図	焼台手印拓本(4).....	60
第55図	焼台手印拓本(5).....	61
第56図	播鉢土層別形態分布図.....	65
第57図	播鉢形態別土層分布図.....	66
第58図	播鉢土層別平面分布図(1).....	67
第59図	播鉢土層別平面分布図(2).....	68
第60図	播鉢土層別平面分布図(3).....	69
第61図	播鉢土層別平面分布図(4).....	70
第62図	播鉢土層別平面分布図(5).....	71
第63図	播鉢土層別平面分布図(6).....	72

第64図	遺構配置図	73
第65図	竪穴状落ち込み・土塙平面図及び断面図	74

目 次

第1表	下相野窯周辺丹波焼窯地名表	8
第2表	播鉢形態別出土層別数量一覧表	64
第3表	近世丹波焼播鉢編年表	77・78

図 版 目 次

巻首カラー図版1	上	調査地区 全景	(東から)
	下	播鉢断面形態分類	
巻首カラー図版2	上	播鉢 (大・小)	
	下	焼台	
図版1	上	調査地区遠景	(北東から)
	下	調査地区近景	(南から)
図版2	上	調査地区全景と物原	(東から)
	下	竪穴状落ち込み	(南東から)
図版3	上	土塙	(南東から)
	下	同土塙断面	(南から)
図版4	上	C・D-12・13区土層堆積	(南から)
	下	C・D-13・14区土層堆積	(南から)
図版5	上	C・D-10・11区土層堆積	(南から)
	下	調査地区と平野部	(南西から)
図版6	上	物原第1層出土遺物播鉢内面(1)	
	下	同 播鉢外面	
図版7	上	物原第1層出土遺物播鉢内面(2)	
	下	同 播鉢外面	

图版 8	上	物原第 1 层出土遗物擂钵内面(3)
	下	同 擂钵外面
图版 9	上	物原第 1 层出土遗物擂钵内面(4)
	下	同 擂钵外面
图版 10	上	物原第 1 层出土遗物擂钵内面(5)
	下	同 擂钵外面
图版 11	上	物原第 1 层出土遗物擂钵内面(6)
	下	同 擂钵外面
图版 12	上	物原第 1 层出土遗物擂钵内面·外面(7)
	下	同 烧台
图版 13	上	物原第 2 层出土遗物擂钵内面(1)
	下	同 擂钵外面
图版 14	上	物原第 2 层出土遗物擂钵内面(2)
	下	同 擂钵外面
图版 15	上	物原第 2 层出土遗物擂钵内面(3)
	下	同 擂钵外面
图版 16	上	物原第 2 层出土遗物擂钵内面(4)
	下	同 擂钵外面
图版 17	上	物原第 2 层出土遗物擂钵内面(5)
	下	同 擂钵外面
图版 18	上	物原第 2 层出土遗物擂钵内面(6)
	下	同 擂钵外面
图版 19	上	物原第 2 层出土遗物擂钵内面·外面(7)
	下	同 烧台
图版 20	上	物原第 3 层出土遗物擂钵内面(1)
	下	同 擂钵外面
图版 21	上	物原第 3 层出土遗物擂钵内面(2)
	下	同 擂钵外面
图版 22	上	物原第 3 层出土遗物擂钵内面(3)
	下	同 擂钵外面
图版 23	上	物原第 3 层出土遗物擂钵内面(4)
	下	同 擂钵外面

図版24	上	物原第3層出土遺物擋鉢内面(5)
	下	同 擋鉢外面
図版25	上	物原第3層出土遺物擋鉢内面(6)
	下	同 擋鉢外面
図版26	上	物原第3層出土遺物擋鉢内面(7)
	下	同 擋鉢外面
図版27	上	物原第3層出土遺物擋鉢内面(8)
	下	同 擋鉢外面
図版28	上	物原第3層出土遺物擋鉢内面(9)
	下	同 擋鉢外面
図版29	上	物原第3層出土遺物擋鉢内面・外面 ¹⁰
	下	同 烧台(1)
図版30	上	物原第3層出土遺物烧台(2)
	下	同 烧台(3)
図版31	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(1)
	下	同 擋鉢外面
図版32	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(2)
	下	同 擋鉢外面
図版33	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(3)
	下	同 擋鉢外面
図版34	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(4)
	下	同 擋鉢外面
図版35	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(5)
	下	同 擋鉢外面
図版36	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(6)
	下	同 擋鉢外面
図版37	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(7)
	下	同 擋鉢外面
図版38	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(8)
	下	同 擋鉢外面
図版39	上	物原第4層出土遺物擋鉢内面(9)
	下	同 烧台(1)

图版40	上	物原第4層出土遺物烧台(2)
	下	同 烧台(3)
图版41	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(1)
	下	同 播鉢外面
图版42	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(2)
	下	同 播鉢外面
图版43	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(3)
	下	同 播鉢外面
图版44	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(4)
	下	同 播鉢外面
图版45	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(5)
	下	同 播鉢外面
图版46	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(6)
	下	同 播鉢外面
图版47	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(7)
	下	同 播鉢外面
图版48	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(8)
	下	同 播鉢外面
图版49	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(9)
	下	同 播鉢外面
图版50	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(10)
	下	同 播鉢外面
图版51	上	物原第5層出土遺物播鉢内面(11)
	下	同 烧台
图版52	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(1)
	下	同 播鉢外面
图版53	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(2)
	下	同 播鉢外面
图版54	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(3)
	下	同 播鉢外面
图版55	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(4)
	下	同 播鉢外面

図版56	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(5)
	下	同 播鉢外面
図版57	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(6)
	下	同 播鉢外面
図版58	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(7)
	下	同 播鉢外面
図版59	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(8)
	下	同 播鉢外面
図版60	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(9)
	下	同 播鉢外面
図版61	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(10)
	下	同 播鉢外面
図版62	上	物原第6層出土遺物播鉢内面(11)
	下	同 播鉢外面
図版63	上	物原第6層出土遺物播鉢内面・外面(12)
	下	同 焼台
図版64	上	竪穴状落ち込み出土遺物播鉢内面
	下	同 播鉢外面
図版65	上	物原出土遺物壺・鉢
	下	物原出土遺物壺
図版66	上	物原出土遺物鉢
	下	物原出土遺物壺
図版67	上	物原出土遺物甕
	下	物原出土遺物蓋・甕
図版68	上	物原出土遺物鉢
	下	物原出土遺物手捏土製品ほか
図版69	上	物原出土遺物瓦
	下	物原出土遺物古銭
図版70	上	物原出土遺物播鉢重ね焼状況(1)
	下	同 (2)
図版71	上	物原出土遺物播鉢重ね焼状況(3)
	下	同 (4)

第1章 はじめに

第1節 近畿自動車道舞鶴線に伴う調査

近畿自動車道舞鶴線（以下「近舞線」と略称する）は、丹波・丹後地方と京阪神地域を結ぶ幹線道路として計画された総延長76.5kmの高速自動車道である。このうち福知山市～三田市間（53.8km）は昭和48年10月に施工命令がだされ、日本道路公団において建設に必要な事前調査と設計事務が始まっている。その後、昭和52年9月に福知山市～丹南町（41.2km）と、同54年3月に吉川町～三田市（12.6km）の路線発表があった。

一方、事業区域内（兵庫県側）の埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては日本道路公団と兵庫県教育委員会で協議を重ね、路線発表後の昭和53・54・55年度に分布調査を実施してきた。さらに昭和59年度には、溜池改修・工事用道路等付帯工事に伴う地域の分布調査も行った。その結果、最終的に64地点の遺跡・散布地等が確認され、随時遺跡保存協議の末、確認調査を含め53遺跡の事前調査が必要という結論に至ったのである。

なお、遺跡確認・全面調査は昭和56年度に丹南インター予定地の西吹及び杉の散布地から開始し、基本的に福知山工事区から三田工事区へと進め〔56年度—3ヶ所・57年度—14ヶ所・58年度—15ヶ所・59年度—18ヶ所・60年度—20ヶ所・61年度—9ヶ所（以上同一遺跡で多年度に渡るものを含む）〕同61年度の丹南町に所在する初田館跡の調査をもって完了した。

第2節 調査に至る経過

近舞線三田工区工事用道路建設の事業計画が立案され、藍本西と下相野ルートが決定した。このルートにかかる埋蔵文化財については、昭和59年度に日本道路公団・三田市教育委員会・兵庫県教育委員会の三者で協議し、周辺のは場整備事業とも絡むことから市教育委員会が分布調査を実施することになった。その結果、下相野ルート（STA. 3+80付近）に多量の擋鉢が発見され、下相野窯址の物原の一部がかかることを確認したのである。なお、西側の丘陵斜面には蛇窯と考えられる窯址が比較的良好な状況で残存している。

下相野近世窯址は、地元では釜屋の字名で上相野の近世窯址等とともに早くからその存在が知られており、『丹波の古窯』の著者杉本捷雄は昭和13年に踏査している。

この物原の取扱いについては、道路盛土が近辺まで押し寄せ、周辺のは場整備の絡みからも保存は難しい状況にある。そこで公団と県教育委員会の協議により、まず物原の範囲の確認調査をおこない、その結果を持って全面調査を実施するという結論に至ったのである。

第3節 調査概要とその組織体制

1. 確認調査

確認調査は、昭和60年10月末に実施した。調査の目的は、工事用道路建設用地内の物原の範囲と遺構の有無を確認することにある。

試掘壕（1m×5m）は、用地範囲に合わせて長軸方向に10ヶ所を設定（第1図）し、開始した。その結果、No7トレンチからNo10トレンチに丹波焼の遺物包含層を確認し、No10トレンチでは土壌状の落ち込みも検出した。また、物原の中心部にはその厚さを覆むために直交方向に1ヶ所試掘壕を増やしている。なお、西側の工事範囲外にあたる地区では竪穴に平行する階段状の物原が拉がり、調査対象地は物原全体の約1/10程度であることも明らかになった。

2. 全面調査

前記した確認調査の結果を受けて、翌日から遺物の濃密に散布する範囲約240㎡の全面調査に入った。

調査実施の目的は、物原の器種構成と竪穴の操業年代の把握、No10トレンチ部分の遺構の拉がり（範囲）及び性格を確認することにある。特に、近世丹波焼の遺跡調査は初めてのことであり、主要遺物である播磨の編年が可能になるかどうか重要な視点である。

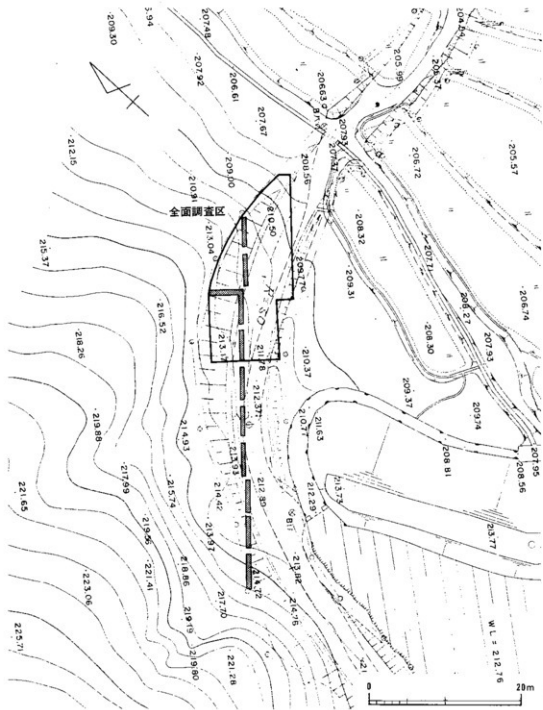
調査方法は、調査範囲に5mグリッドを設定し、全て人力掘削で行った。地区の名称は、第2図の通り南北をC-E、東西を10-14に区分し、各グリッドは東北コーナーの杭をグリッド名とする。

調査は、表土層の人力掘削から始めた。遺物の堆積は、大きく6層に分類できる。グリッドごとに順次掘り下げて、遺物を採取していくことにする。C区の深い所では、表土から約1.80mもある。砂やシルトの堆積がほとんど無く、土器のみの層もあり、1日に土器を収納するコンテナが100箱近く必要な時もあった。次いで、D-11グリッド周辺の黄灰色シルト礫混じり地山層の精査に入り、確認調査時の土壌を完掘した。また、隣のD-12・13グリッドでは、竪穴状の落ち込みを検出している。最後に、各グリッドの土層断面図と写真撮影を行い、土層観察用畦をはずして全景写真を撮る。これをもって現地の調査は完了した。

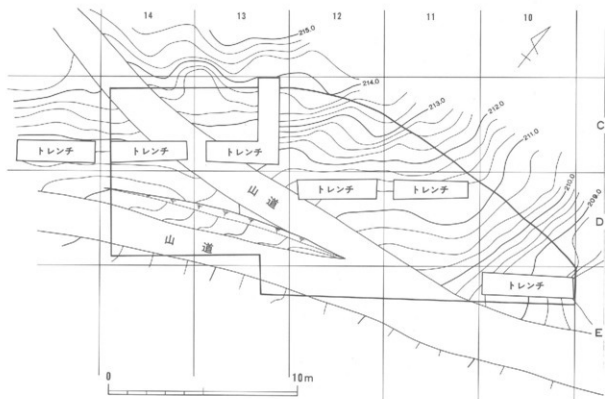
現地説明会は時間の都合もあり実施できなかったが、三田市の教育長・教育委員長の方をはじめ三田市教育委員会の関係者・教員、今田町丹波焼の関係者の方々等多数の見学者が有ったことを付記しておく。

発掘調査の組織体制

調査主体 兵庫県教育委員会 社会教育・文化財課



第 1 図 調査地位位置図



第2図 グリッド設定図



第3図 発掘作業風景

調査体制	事務担当	課	長	北村 幸久
		参	事	森崎 理一
		課	長 補 佐	和田 富男
		埋蔵文化財調査係	長	櫃本 誠一
		技 術 職 員		渡辺 昇
調査担当		技 術 職 員		大平 茂
		技 術 職 員		村上 賢治
		調 査 補 助 員		小谷 五郎、小谷 義男
		現 場 事 務 員		上田 幸江

発掘作業委託 佛染の川組

調査実施期日

(自)昭和60年10月24日 ~ (至)昭和60年12月9日(実働24日間)

3. 整理調査

日本道路公団から委託を受けた兵庫県教育委員会は、昭和61年度、平成2年度及び3年度に明石市・魚住分館と兵庫県埋蔵文化財調査事務所において整理作業を実施した。整理作業の内容は、1. 水洗 2. ネーミング 3. 接合・復元 4. 実測・拓本 5. 写真撮影 6. トレース 7. 原稿執筆 8. レイアウト 9. 印刷 10. 報告書刊行である。

出土遺物は、整理用コンテナに1,594箱あり、その大部分は下相野窯で焼成された製品(播鉢)と窯道具の焼台である。他には、若干の金属製品(古銭)がある。

整理調査の組織体制 (平成2年度)

調査主体	兵庫県教育委員会	埋蔵文化財調査事務所
調査体制	事務担当	所 長 内田 隆義
		副 所 長 村上 絃揚
		副 所 長 才木 繁
		整 理 普 及 課 長 松下 勝
		技 術 職 員 岸本 一宏
		主 任 村上 泰樹
調査担当	主	査 大平 茂
		技 術 職 員 村上 賢治
		嘱 託 職 員 和田早芳子

(平成3年度)

調査主体 兵庫県教育委員会 埋蔵文化財調査事務所

調査体制	事務担当	所	長	内田	隆義				
		副	所	長	駒井 功				
		副	所	長	才木 繁				
		整	理	普	及	課	長	松下	勝
		課	長	補	佐	小川	良太		
		主	査	岡崎	正雄				
調査担当	主	査	大平	茂					
	主	任	村上	賢治					
	嘱	託	職	員	松本	睦			



第4図 整理作業風景

第2章 遺跡をとりまく環境

第1節 地理的環境

下相野近世窯址は三田市下相野字釜屋に所在する。三田市はJR大阪駅から福知山線を北西へ約34km行った所にあり、調査地区下相野は三田市街地からさらに北西へ約10kmの地点にある。この地はJR福知山線相野駅から0.8km、丹波焼の中心地である今田町から南へ約4kmにあたる、のどかな田園地帯である。旧国でいえば摂津国の北西端にあり、北は丹波国、西は播磨国に至る古来からの交通上の要衝ともなっている。

遺跡は相野川（武庫川の支流）西岸の北東に延びる低丘陵の東斜面山麓部に立地し、標高は約214mを測る。

周辺の地形は、南に神戸層群からなる標高200～300mの低い丘陵が連なり、その北を谷部の西から東へ向かって相野川が流れる。両岸は段丘がよく発達しており、西岸には開折谷も認められる。この開折谷により刻まれた丘陵の斜面には、須恵器の窯址が多数造られている。

第2節 歴史的環境

丹波焼は、平安時代末から鎌倉時代初めに東海系窯の影響を受け成立したと言われる日本六古窯の一つである。古くは小野原焼、今日では立杭焼とも呼称され、中世から現代まで途絶えることなく連続と作り続けられているやきものである。その中心地は、三田市相野から峠を越えた、多紀郡今田町の四斗谷川を挟む北から立杭・下立杭及び釜屋にある。

現在までに判明している中世の穴窯は、四斗谷川の東部丘陵に位置する立杭の南や東の山中に**三本峠北・南窯**（2・3）、**太郎三郎窯**（4）、**源兵衛山窯**（5）、**床谷北・南窯**（6・7）、**稲荷山窯**（8）がある。

これらの窯址は、鎌倉時代初期から室町時代前期の年代のものと推定され、この地域を領地とした摂津国一宮の『住吉大社』と密接な関係にあったと言われる。いままも小野原には「蛙ノ宮」として知られる住吉神社が鎮座しているのである。製品は壺・甕・播鉢の三種が主体と考えられ、室町時代に入って独自の形を確立したようである。

なお、発掘調査が実施されたのは三本峠北窯の物原の一部であるが、この調査により丹波焼初期の製品の様相が少しずつ明らかになってきた。窯の構造は定かでないが、西脇市野村町の緑風台で発見されたものと同様に焚き口に分炎柱を設けた穴窯と推定されている。

次に、室町時代前期以降のものについては、窯跡が不明であり、紀年銘のあるもの等伝世品（甕・壺・德利・鉢）による研究が進められてきた。これらによれば、桃山時代が穴窯時代の

最終期とされ、江戸時代慶長年間頃に登窯に移行したと言われる。丹波焼独特の猫掻と呼ばれる成形法に手印(窯印)や、窯詰め法の改良である重ね焼等の新しい特徴も生まれている。この時期、当該地は守護・守護代と支配体制が変わり山名氏から細川氏へ、さらに江戸時代には篠山藩松平氏の所領となり、近世幕藩体制のもとで都市文化の影響を受け、丹波焼は大きく転換していくのである。

江戸期のものは、四斗谷川の西部丘陵に位置し中世のものと同期的な立地を示す。立杭と釜屋に上立杭北・中・南窯(9~11)、下立杭北・中・南窯(12~14)、南下立杭窯(15)、釜屋北・中・南窯(16~18)があり、甕・壺・徳利・播鉢が主な製品として焼かれている。また、三田市相野には上相野釜屋窯(19)、鷹ヶ尾西1号・2号窯(20・21)、鷹ヶ尾東窯(22)、上相野窯(23)と下相野釜屋窯(1)が存在し、播鉢が主に焼かれている。三田市四辻周辺にも窯があったと言うが、詳細は明らかでない。さらに西脇市に播鉢が主製品の鹿野窯、篠山町に茶陶を焼く山内窯、春日町には大路窯というように、分布は小野原のみならず丹波そして隣接地の摂津・播磨へと広がっている。この生産量の拡大は、連房式登窯の導入と承応3年(1654)に登窯の経営を請け負うという窯座制が始まってくることに大いに関係するのである。なお、最近の消費地の発掘資料では、17世紀代の丹波焼播鉢が畿内のみならず江戸の町まで流通していることが判明してきた。

窯の構造は、調査されたものが皆無のため明らかでないが、窯屋をはじめ下相野窯・鹿野窯に残存する蛇窯と呼ばれる長さ50m前後の連房式登窯が想定できよう。

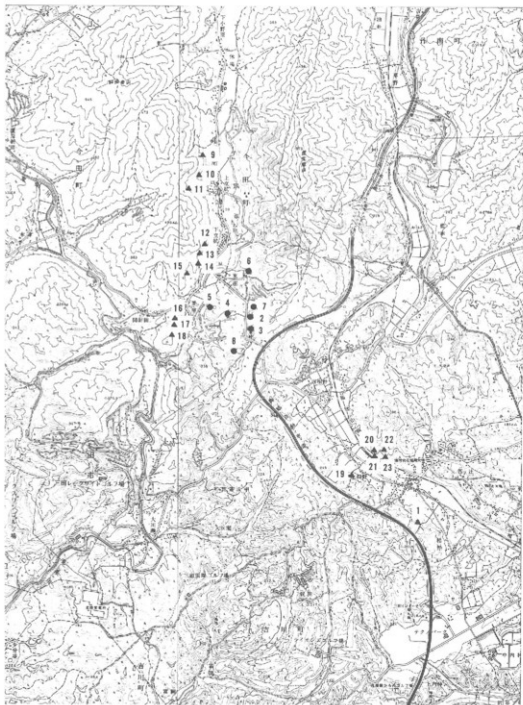
登窯の採用とともに釉薬も使用され始め、江戸前期に灰釉・赤土部釉が、中期には栗皮釉・黒釉そして白泥を使用する白丹波が出現し、最盛期を迎えるのである。

しかし、明治から昭和初期にかけては、飲食器が磁器の普及におされ激減し、土管・耐酸瓶・植木鉢を焼き続け、最近の焼物ブームで復活して現在に至るのである。

第1表 下相野窯周辺丹波焼窯地名表

No.	窯 址 名	地 名	時代
1	下相野窯	三田市下相野	江戸
2	三本峠北窯	今田町東庄	中世
3	三本峠南窯	今田町東庄	中世
4	太郎三郎窯	今田町釜屋	中世
5	源兵衛山窯	今田町釜屋	中世
6	床谷北窯	今田町東庄	中世
7	床谷南窯	今田町東庄	中世
8	稲荷山窯	今田町釜屋	中世
9	上立杭北窯	今田町上立杭	近世
10	上立杭中窯	今田町上立杭	近世
11	上立杭南窯	今田町上立杭	近世
12	下立杭北窯	今田町下立杭	近世

No.	窯 址 名	地 名	時代
13	下立杭中窯	今田町下立杭	近世
14	下立杭中窯	今田町下立杭	近世
15	南下立杭窯	今田町釜屋	近世
16	釜屋北窯	今田町釜屋	近世
17	釜屋中窯	今田町釜屋	近世
18	釜屋南窯	今田町釜屋	近世
19	上相野釜屋窯	三田市上相野	近世
20	鷹ヶ尾西1号窯	三田市上相野	近世
21	鷹ヶ尾西2号窯	三田市上相野	近世
22	鷹ヶ尾東窯	三田市上相野	近世
23	上相野窯	三田市上相野	近世



第 5 图 下相野廬周边丹波烧窯址分布图



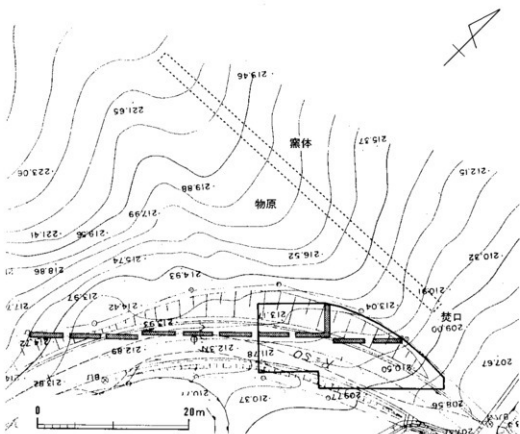
第 6 圖 立杭登窯

第3章 調査の記録

第1節 遺跡の立地

下相野近世窯址は、三田市下相野集落の西約0.5kmにある低丘陵の東斜面山麓部に位置している。窯体の所在する斜面の谷は北東に向かって開ける小谷で、奥には上・中・下の三つの池があり、水田地となっている。

窯址は、調査地の北約10mの標高210m～220mの位置にあり、東西向きに立地する約50mの長さをもつ連房式登窯である。また、その南側には窯と並行に一段約10m×4mの12の階段状の物原が存在する。調査地は、窯焚口の横と考えられるこの物原の東端一番下位列の部分である。標高は210～213mを測る。(第7図)



第7図 窯体と物原の位置図

第2節 物原の層序と出土遺物

1. 物原の基本堆積土層と出土遺物

物原は竈址南横の東西長軸幅約50m、南北幅約10mの範囲と想定でき、12の階段状に分かれている。このうち調査地区は、一番下位列の一部であった。

発掘区域の土層堆積の状況は第8図の通りであり、大きく整理すると、以下のように分層できる。

①. 表土層（遺物包含層1）

植物等の腐食土層で、厚さが5cm前後の堆積である。出土遺物は播鉢・壺・甕・鉢等の製品と竈道具の焼台の他、古銭がある。

②. 遺物包含層2

暗赤褐色の粗砂から小石混じりの層で、粘性があり、焼土ブロックを多く含む。厚さは20～30cmを測り、調査地全域に広がっている。出土遺物は播鉢・甕・瓦等の製品と竈道具の焼台がある。

③. 遺物包含層3

赤褐色または黄褐色を呈する中砂から小石混じりの層で、粘性がある。赤褐色の部分には、焼土ブロックを多く含む。厚さは20～40cmを測り、調査地区のDラインより斜面上部（北西）にみられる。出土遺物は播鉢・壺・甕・瓦等の製品と竈道具の焼台他、古銭がある。

④. 遺物包含層4

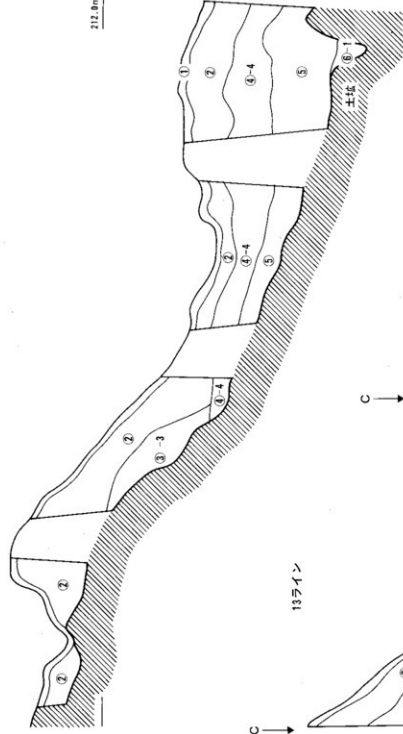
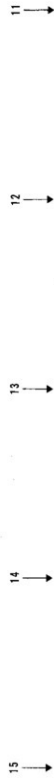
赤褐色、淡黄色または赤黄色を呈する粗砂から小石混じりの層で、粘性がある。赤褐色の部分には、焼土ブロックを多く含む。厚さは35～80cmを測り、大半は調査地区のDラインより斜面上部（北西）に存在する。堅穴住居状遺構の埋土はこれと同じ層である。出土遺物は播鉢・甕・鉢等の製品と竈道具の焼台がある。

⑤. 遺物包含層5

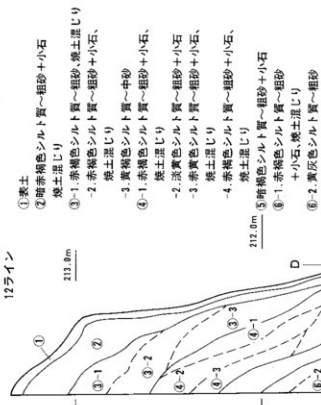
暗褐色の粗砂から小石混じりの層で、粘性がある。厚さは10～30cmを測り、大半は調査地区のDラインより斜面上部（北西）にある。出土遺物は播鉢・壺・甕・鉢等の製品と竈道具の焼台がある。

⑥. 遺物包含層6

赤褐色または黄灰色を呈する粗砂から小石混じりの層で、粘性がある。赤褐色の部分には、焼土ブロックを多く含む。厚さは15～35cmを測り、調査地区のDラインより斜面上部（北西）に存在する。土壌の埋土はこの層である。出土遺物は播鉢・甕・鉢等の製品と竈道具の焼台がある。



12ライン



- ①表土
 ②暗赤褐色シルト質～粗砂+小石
 焼土混じり
 ③-1.赤褐色シルト質～粗砂、焼土混じり
 -2.赤褐色シルト質～粗砂+小石、
 焼土混じり
 -3.黄褐色シルト質～中砂
 焼土混じり
 ④-1.赤褐色シルト質～粗砂+小石、
 焼土混じり
 -2.淡黄色シルト質～粗砂+小石
 -3.赤褐色シルト質～粗砂+小石、
 焼土混じり
 -4.赤褐色シルト質～粗砂+小石、
 焼土混じり
 ⑤暗褐色シルト質～粗砂+小石
 ⑥-1.赤褐色シルト質～粗砂+小石、
 焼土混じり
 ⑥-2.黄褐色シルト質～粗砂

第8図 土層断面図

211.8m

211.8m



1 m

5 m

2. 出土遺物の概要

物原より出土した遺物は、大半が製品である播鉢とその窯道具の焼台である。そこで、まず播鉢の分類を行い、次に各層から出土する製品、そして窯道具である焼台、その他の遺物の概要を説明する。

◎ 製品

＜播鉢＞(第10～13図、第15～19図、第21～26、第28～32図、第34～37図、第39～43図、第45図、第47～50図)

大振り(口縁部径約30～39cm)と小振り(口縁部径約25cm)の2種類があり、それぞれ口縁部の形態により(A～F類)と(G1・G2類)に細分できる。胎土は全般に砂質が強く、これに石英・長石・雲母等の大きさがまちまちの角張った小石粒を含む。

(1) A類

底部から直線的に開いて立ち上がり、口縁部はそのまま切り離した形を呈する。口縁端面と体部がほぼ直角をなし、口縁部内面に凹線または段がみられる。そして、凹線以下体部内面と底部内面に4～6本を基本とするクシ描の描目を設けている。底部内面の描目は、+あるいは×をつけた後、外周に円を描く。整形調整は、粘土紐巻き上げ成形の後、口縁部付近をロクロナデ、体部外面4/5下部を連続する斜位の指頭によるオサエ、底部付近はヘラによるナデまたはケズリを施す。無釉焼き締めであり、断面色は酸化焙焼成で、表面は暗橙褐色を呈す。体部内面下位には、播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っている。形態の典型は遺物実測図No219・220・283等である。

(2) B類

直線的に開いて立ち上がる形態で、A類の切り離し状の口縁端部を強くナデ、上方に拡張する。口縁部内面に凹線を施し、凹線以下体部内面と底部内面に4～6本を基本とするクシ描の描目を設けている。調整はA類と同じである。内外面に鉄泥漿(泥土)を塗布し、断面色は還元焙焼成で、表面は濃褐色を呈する。体部内面下位には、播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っている。典型は遺物実測図No216・254・257等である。



第9図 播鉢断面形態分類写真

(3) C類

B類の口縁端部をさらに強くナデ、上方と横外方に肥厚拡張させ縁帯をつくる。その断面形は正三角形を呈する。口縁部内面に凹線を施し、凹線以下体部内面と底部内面に6~8本を基本とするクシ描の描目を設けている。調整・焼成はB類と同じである。表面は濃褐色を呈し、体部内面下位には、播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っている。典型は遺物実測図No110・140・165等である。

(4) D類

C類の口縁端部をさらに上方に拡張させ、縁帯をつくる。そのため、口縁部は直立気味となり、その断面形は二等辺三角形を呈する。その後、立ち上がった端部を外方にナデて、同内面に鈍い稜をもつものがでてくる。内面の口縁部と体部の境に凹線を巡らし、凹線以下体部内面と底部内面に6~8本を基本とするクシ描の描目を設けている。調整・焼成はB類と同じであるが、体部が薄くなる。表面は濃褐色を呈し、体部内面下位には、播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っている。典型は遺物実測図No49・107・163・164等であり、口縁端部が直立のものとこれを外方におさえるものとは二分できそうである。

(5) E類

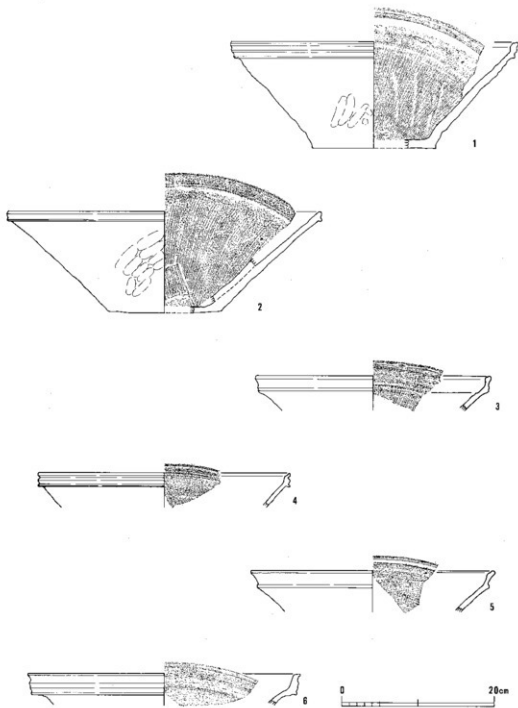
直線的に外傾した体部は先端で水平に開いた後、口縁部が直立するように粘土を積み上げ、縁帯をつくる。縁帯は幅広く、受け口状になる。厚さが一定し、外面はロクロナデによる凸凹が目立ってくる。体部の調整・焼成はB類と同じであるが、外面の指頭によるオサエは3/4下部に狭まる。体部内面と底部内面に施されるクシ描の描目は、9~12本を基本とする。底部内面の描目は、+あるいは×をつけた後、外周に円を描く他、外周に円がないもの、あるいは円が同心円状または渦巻き状のものがみられるようになる。表面は濃褐色を呈し、体部内面下位には、播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っている。典型は遺物実測図No7・15・56・61等である。

(6) F類

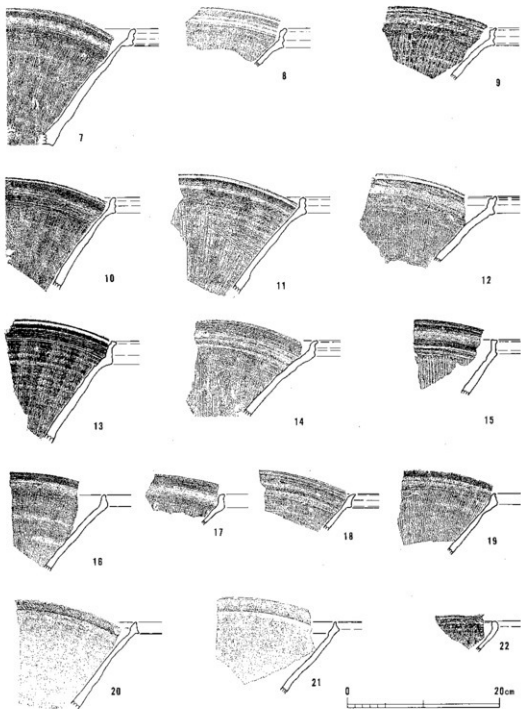
E類と同様な口縁形態であり、E類よりも若干長く、外面の凸凹が強く凹線文風になってくる。単なるロクロナデではなく、クシ状のものを使用するためであろう。クシ描の描目は9~12本を基本とする。体部の調整・焼成はB類と同じである。表面は濃褐色を呈し、体部内面下位には、播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っている。典型は遺物実測図No1・57・105等である。

(7) G1類

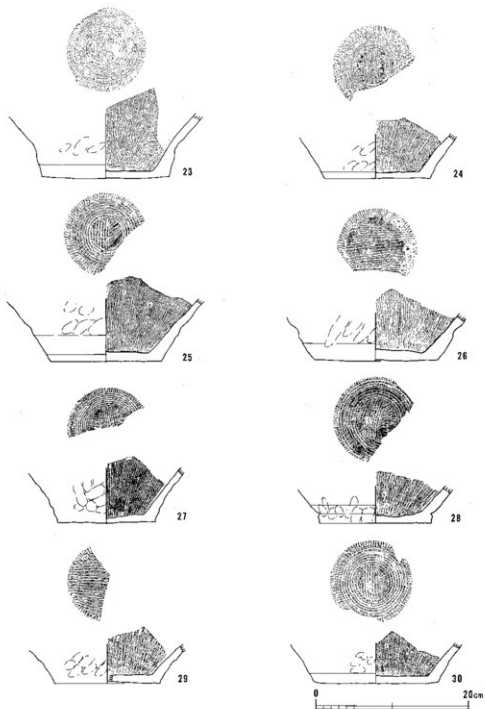
体部は底部からほぼ直線的に開いて立ち上がり、口縁端部を内側に肥厚させる。体部内面と底部内面に6~8本を基本とするクシ描の描目を設けている。底部内面の描目は、+あるいは+をつけた後、外周に円を描く。整形調整は、粘土紐巻き上げ成形の後、口縁部・体部とも口



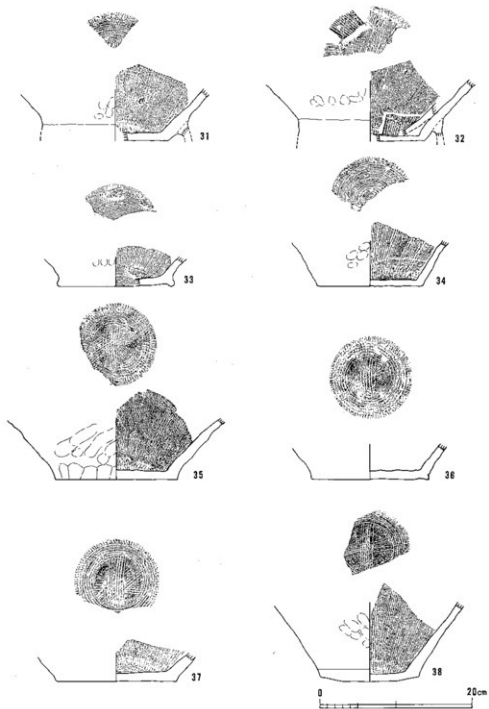
第10図 物原第1層出土遺物(1)



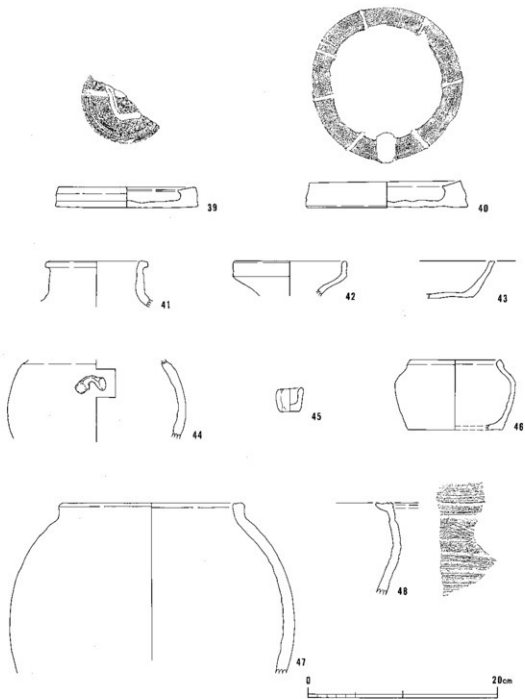
第11圖 物原第1層出土遺物(2)



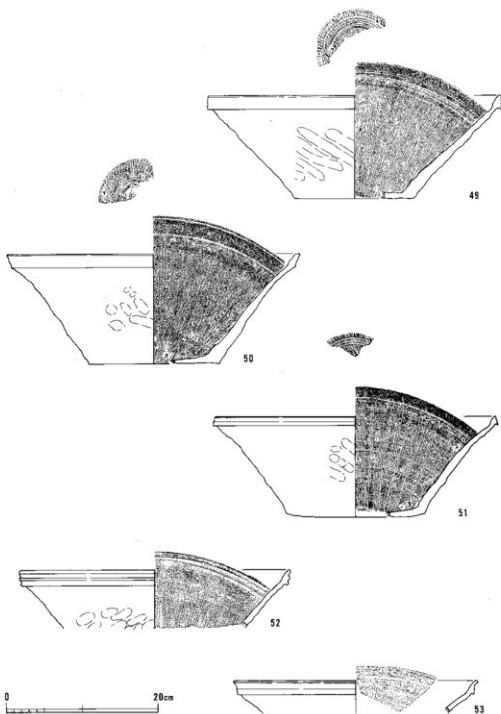
第12図 物原第1層出土遺物(3)



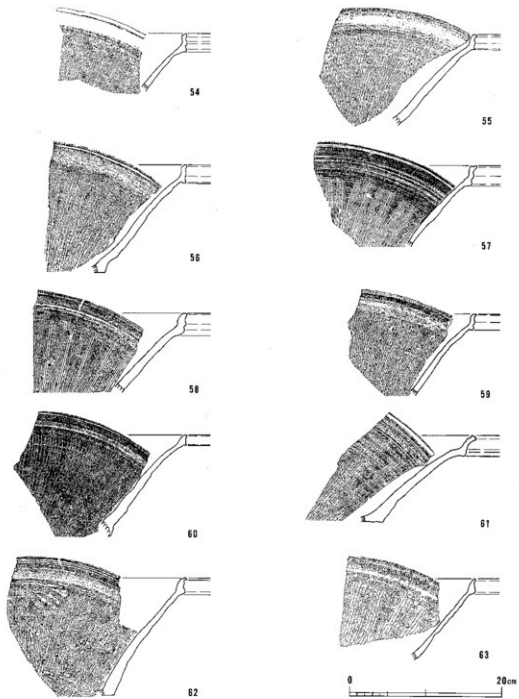
第13区 物原第1層出土遺物(4)



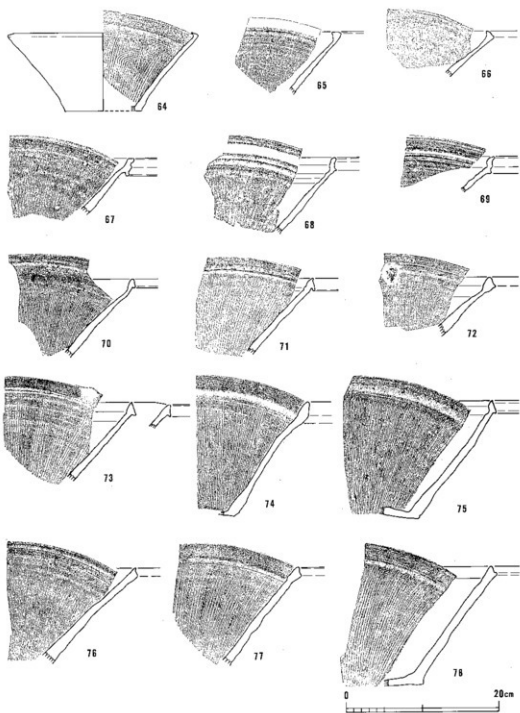
第14図 物原第1層出土遺物(5)



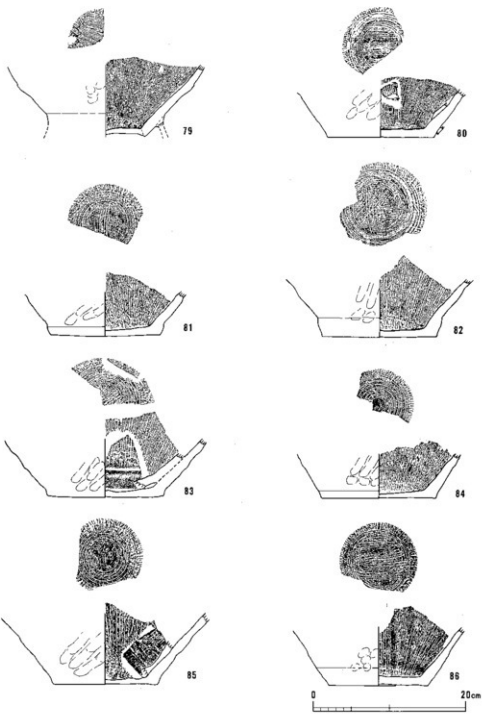
第15圖 物原第2層出土遺物(1)



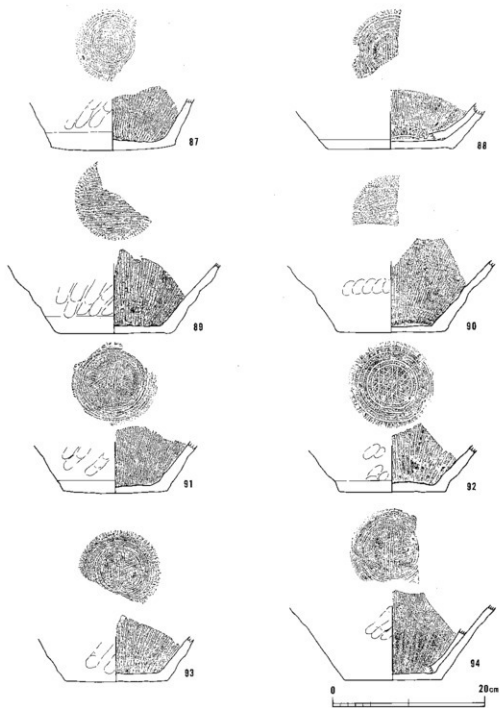
第16圖 物原第2層出土遺物(2)



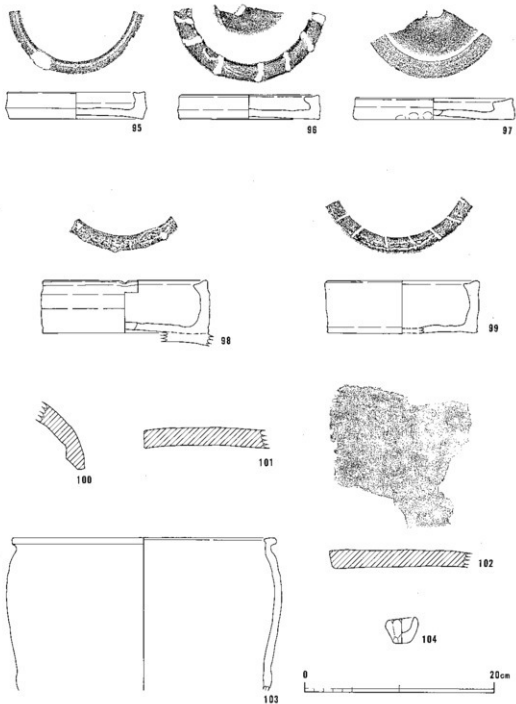
第17圖 物原第2層出土遺物(3)



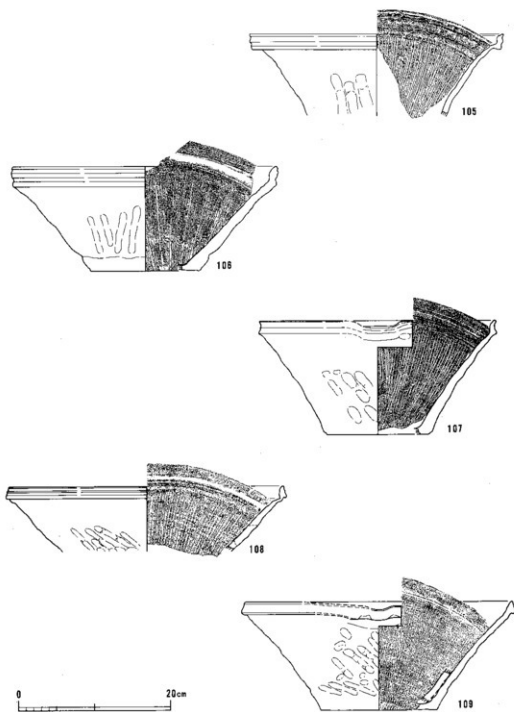
第18図 物原第2層出土遺物(4)



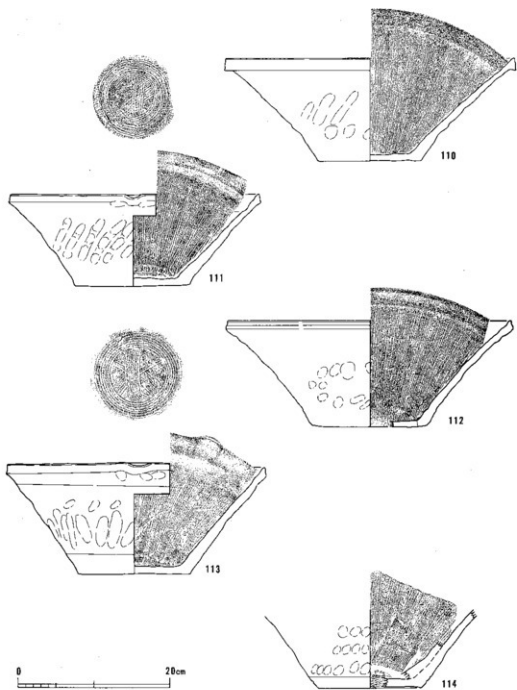
第19圖 物原第2層出土遺物(5)



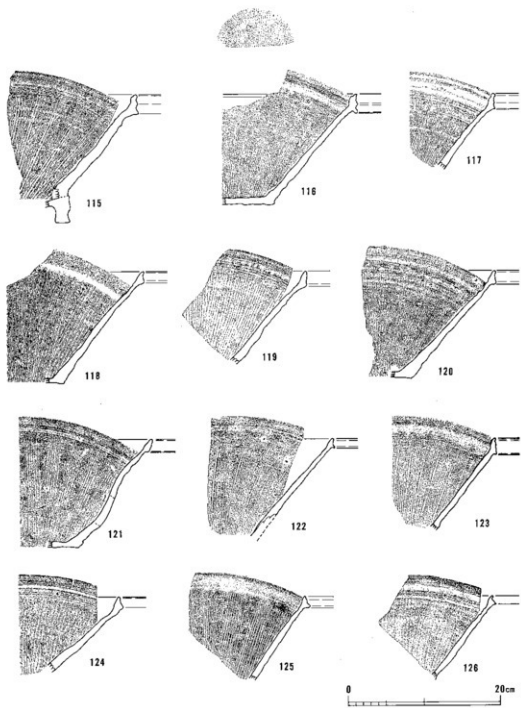
第20図 物原第2層出土遺物(6)



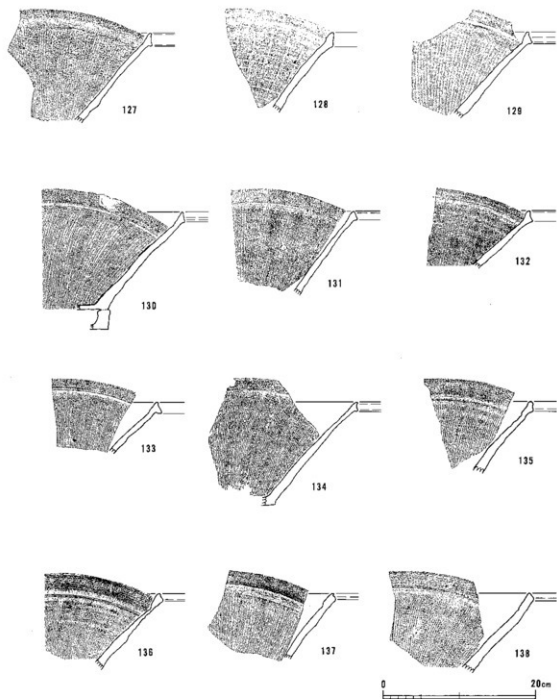
第21圖 物原第3層出土遺物(1)



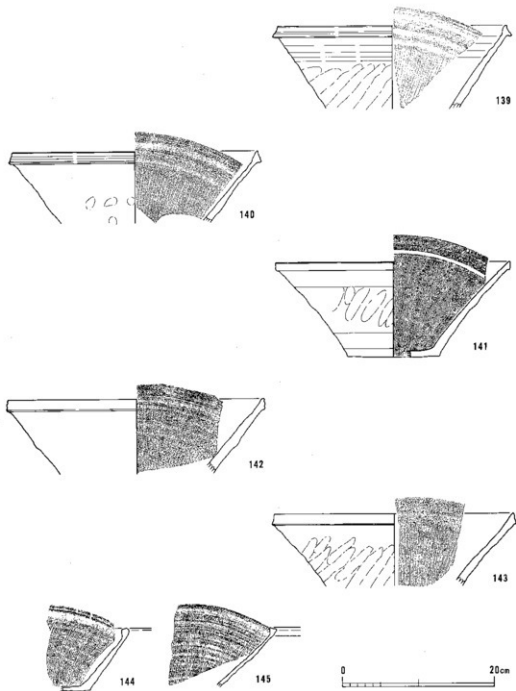
第22図 物原第3層出土遺物(2)



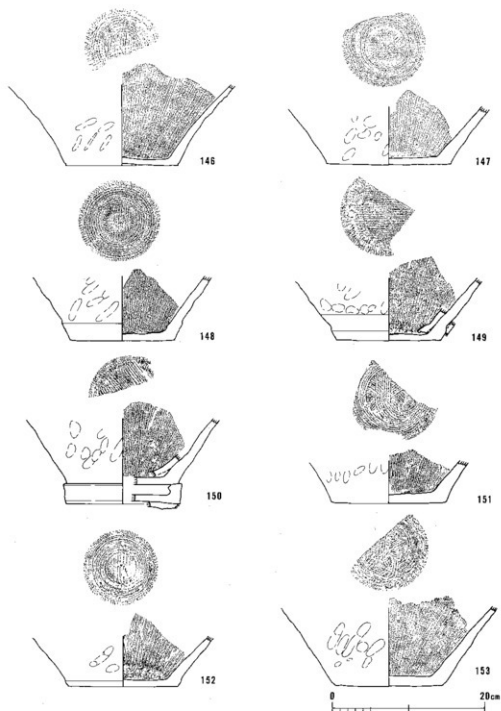
第23圖 物原第3層出土遺物(3)



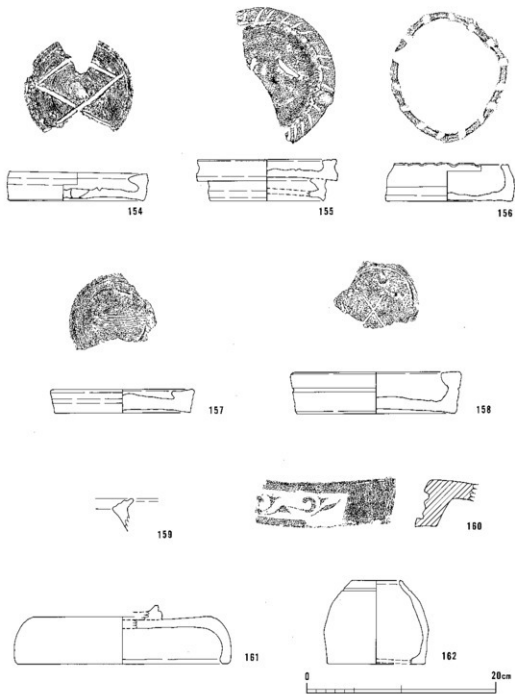
第24図 物原第3層出土遺物(4)



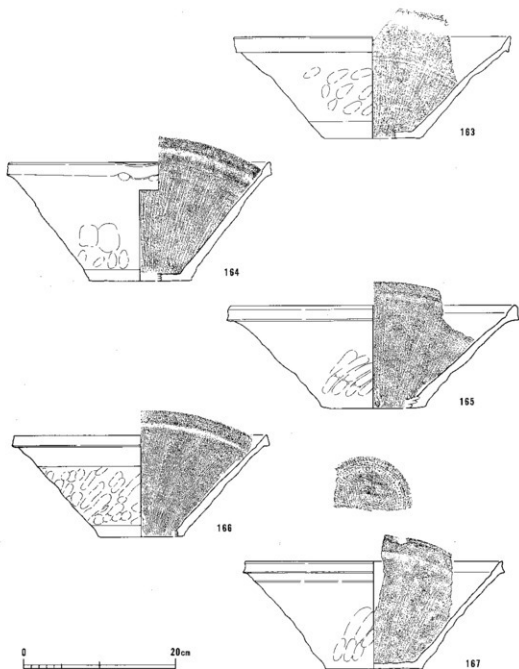
第25図 物原第3層出土遺物(5)



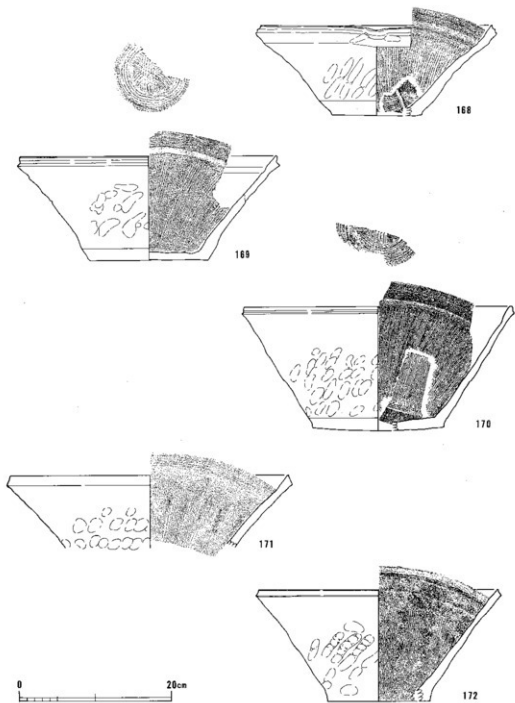
第26図 物原第3層出土遺物(6)



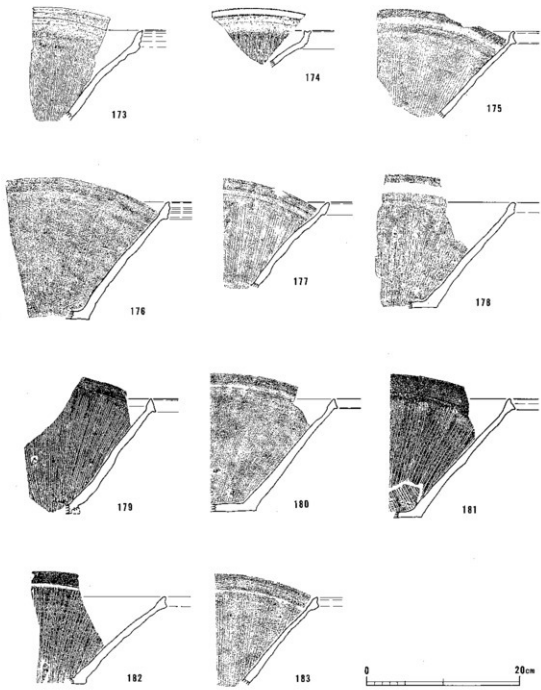
第27圖 物原第3層出土遺物(7)



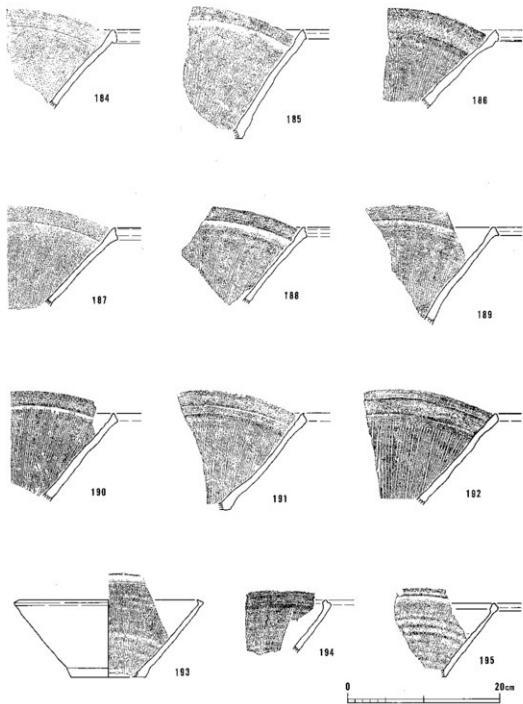
第28図 物原第4層出土遺物(1)



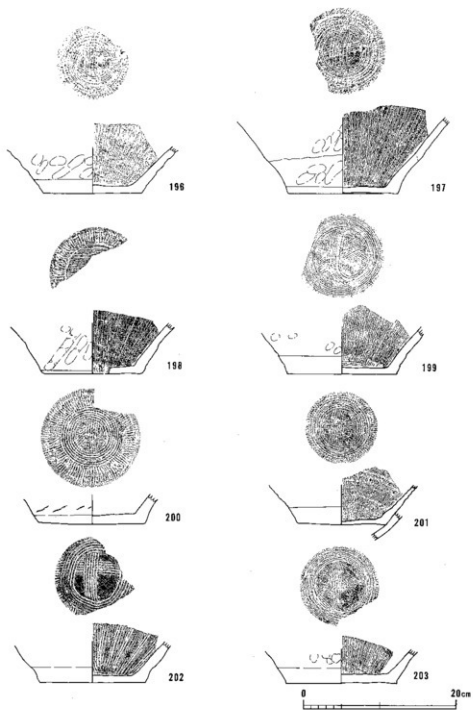
第29圖 物原第4層出土遺物(2)



第30图 物原第4層出土遺物(3)



第31图 物原第4層出土遺物(4)



第32図 物原第4層出土遺物(5)



204



205



206



207



208



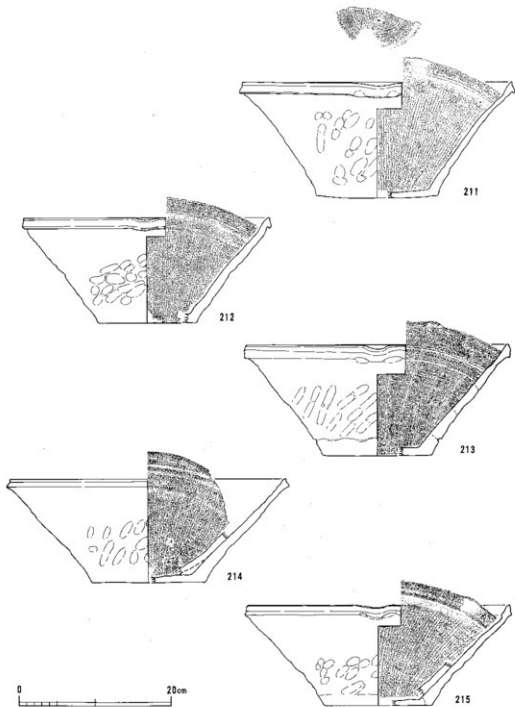
209



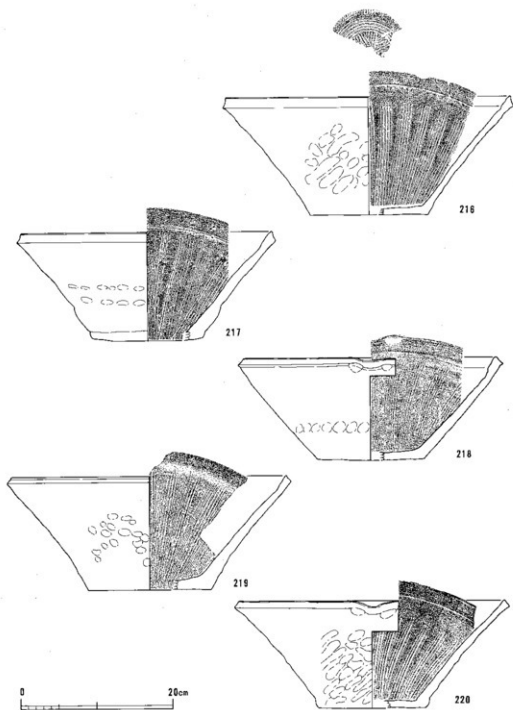
210



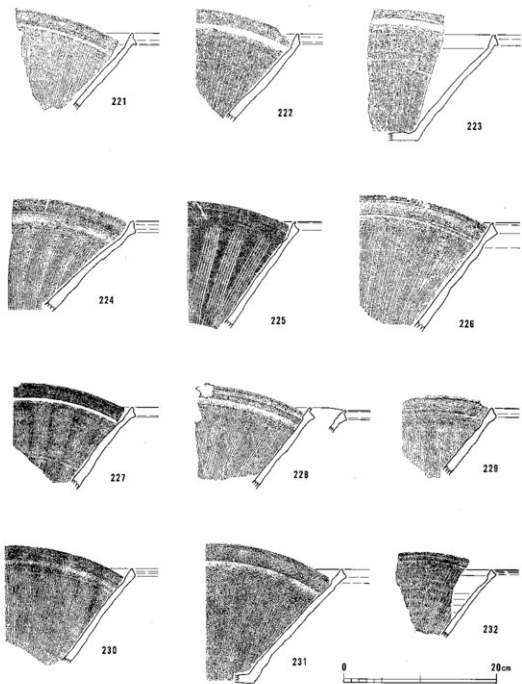
第33図 物原第4層出土遺物(6)



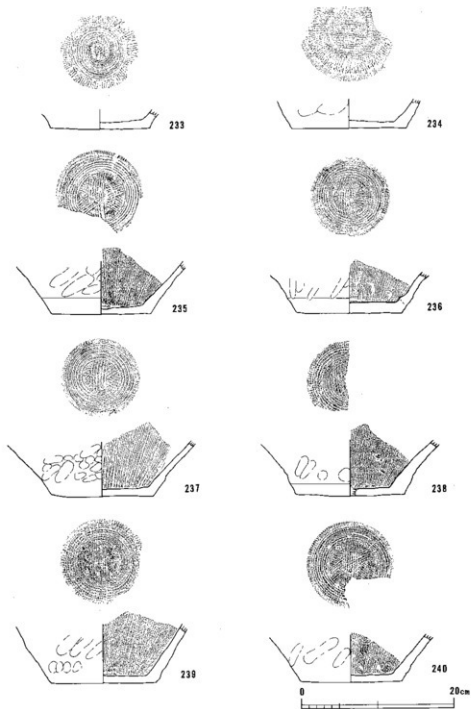
第34圖 物原第5層出土遺物(1)



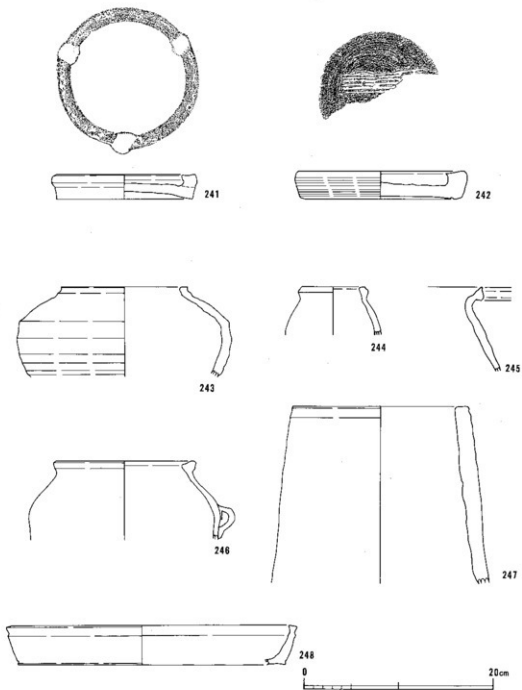
第35図 物原第5層出土遺物(2)



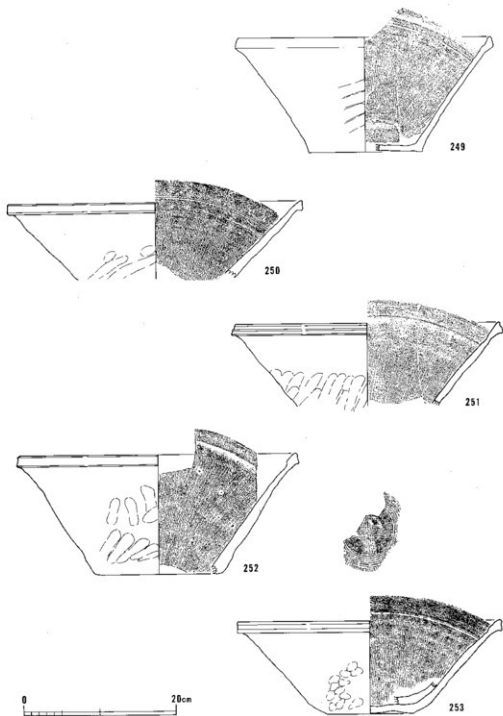
第36図 物原第5層出土遺物(3)



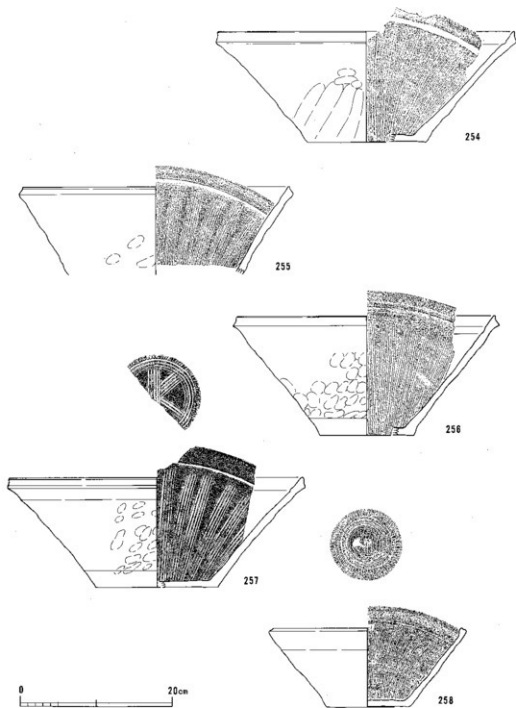
第37圖 物原第5層出土遺物(4)



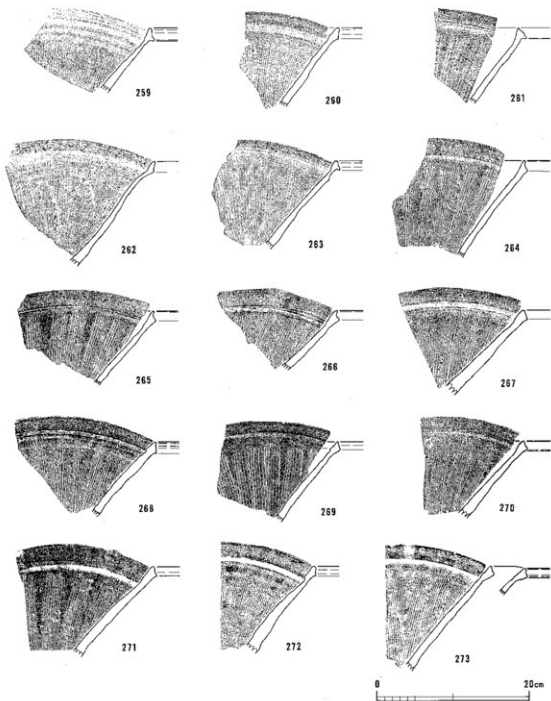
第38回 物原第5層出土遺物(5)



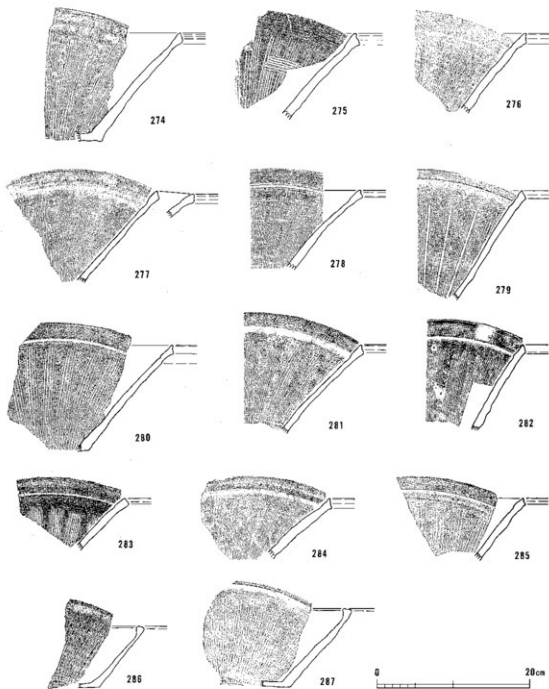
第39図 物原第6層出土遺物(1)



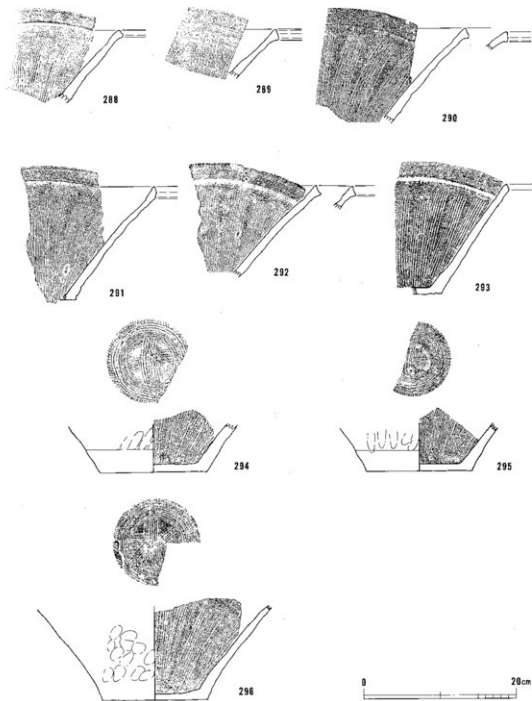
第40圖 物原第6層出土遺物(2)



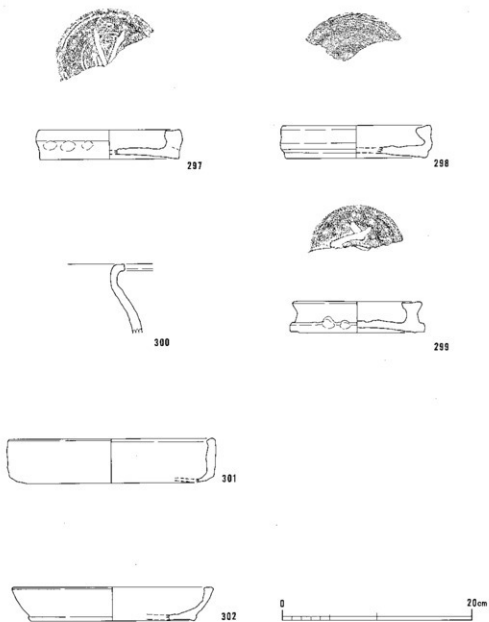
第41圖 物原第6層出土遺物(3)



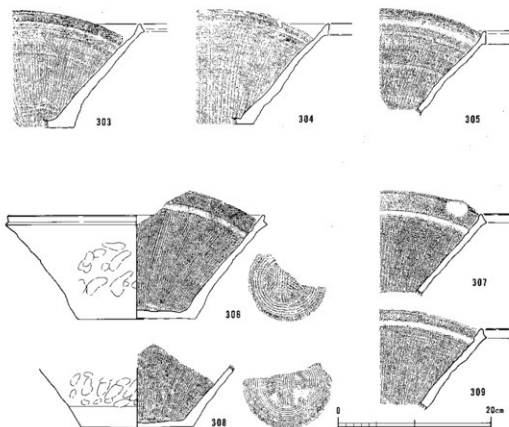
第42圖 物原第6層出土遺物(4)



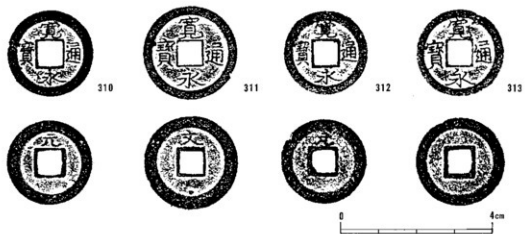
第43図 物原第6層出土遺物(5)



第44図 物原第6層出土遺物(6)



第45図 竪穴状落ち込み・土壌出土遺物



第46図 物原出土古銭拓本

第1層



314



315



316



317



318



319



320



321



322



323



324

第2層



325



326



327



328



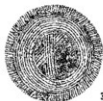
329



330



331



332

第47圖 播鉢見込み拓本(1)



333



334



335



336



337



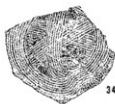
338



339



340



341



342



343



344



345



346



347



348

第3層



349



350

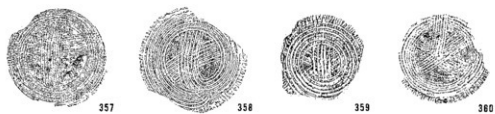


351



352

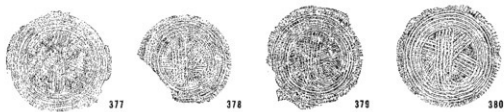
第40図 撞鉢見込み拓本(2)



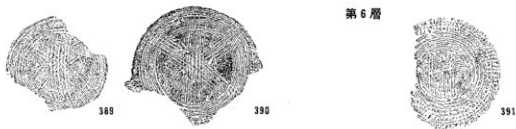
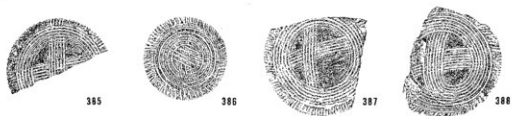
第4層



第49圖 播鉢見込み拓本(3)



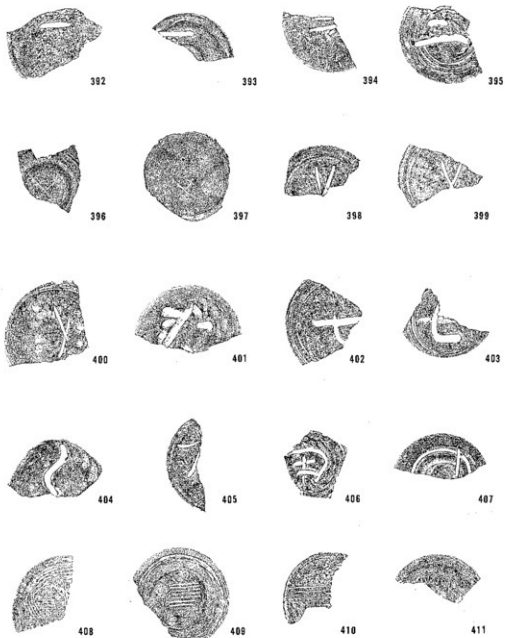
第5層



第6層

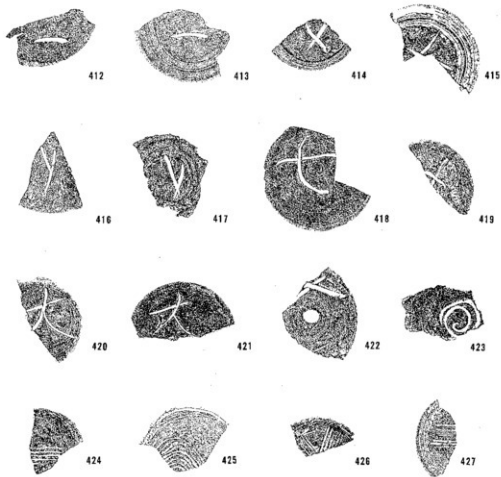
第50図 摺鉢見込み拓本(4)

第1層



第51圖 燒台手印拓本(1)

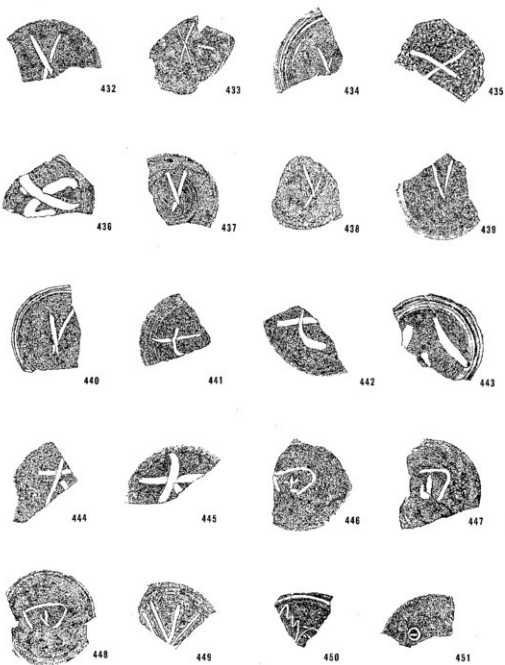
第2層



第3層



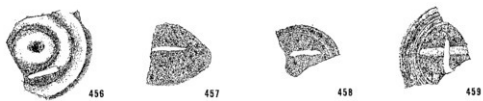
第52圖 焼台手印拓本(2)



第53图 烧台手印拓本(3)



第4層



第54圖 燒台手印拓本(4)



472



473



474



475



476



477



478



479

第5層



480



481

第6層



482



483



484



485



486



487



488



489

第55圖 燒台手印拓本(5)

クロナテを施す。大振りのものに残る指頭によるオサエは認められない。典型は遺物実測図No232・258等である。

(8) G2類

G1類と同様の体部であり、口縁部は端部を押しえ断面T字形あるいは内側に折り曲げる。体部内面と底部内面に8~10本を基本とするクシ描の描目を設けている。整形調整はG1類と同じである。典型は遺物実測図No64・145・193等である。

(9) H類

大振りのものに、貼り付け高台を持つものが若干存在する。全体の器形のわかるものはないが、F類の口縁部が着くのであろう。体部の調整・焼成はB類と同じである。表面は濃褐色を呈し、体部内面下位には、播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っている。典型は遺物実測図No31・32・79等である。編年的には、下相野窯で一番新しい類と考える。

<壺> (第14図 41.44.46.47、第27図 162、第38図 243.244.246)

第1・3・5層から出土している。灰釉が施された有耳壺と灰釉や鉄釉が施された小壺等、大・中・小の壺がある。

<甕> (第14図 48、第20図 103、第27図 159、第33図 210、第38図 245、第44図 300)

第1・2・3・4・5・6層から出土している。大甕は見当たらないが、245のように古いタイプの口縁形態をもつものや、口縁部外面と体部外面にクシ描の文様をもつものがある。

<鉢> (第14図 43、第33図 208.209、第38図 248、第44図 301.302)

第1・4・5・6層から出土しており、浅鉢と深鉢に二分出来る。深鉢には播鉢と同形態で描目がないものや、把手の付くものがある。浅鉢については、盤と呼ぶべきものかもしれない。なお、301は焼台のような窯道具の可能性もある。

<壺> (第27図 161)

第3層から出土している。復元径は約23cmである。稚拙な作りの握みが着き、外面は暗赤褐色を呈する。火消し壺の蓋であらう。第33図 207は蓋なのか、窯道具なのか明らかでない。

<瓦>

軒平瓦・平瓦・丸瓦があるが、下相野窯の製品かどうかは判断しかねる。平瓦の片面にハナレ砂が付着したものがあり、播鉢窯の棚等に使用した窯道具の可能性もある。

(1) 軒平瓦 (第27図 160)

第3層から出土したもので、瓦当部分の半分のみ残存している。中央に唐草文を配し、瓦当縦幅は約5cmである。胎土は播鉢のものより若干石粒の大きいものを含むが、ほとんどかわらない。焼成も無釉の焼き締めで、淡赤褐色を呈している。

(2) 平瓦 (第20図 101.102)

第2層からの出土である。焼成は無釉の焼き締めで、特に101は2次焼成を受けたためか非常に堅緻である。

(3) 丸瓦 (第20図 100)

第2層からの出土である。焼成は無釉の焼き締めで、灰褐色を呈する。厚さ約2cm、復元幅は約16cmとなる。第38図 247は筒状の容器として実測したが、丸瓦になる可能性が高い。

◎ 窯道具

播鉢の焼台がほとんどであり、匣鉢は見当たらない。

<焼台> (第14図 39.40、第20図 95~99、第27図 154~158、第33図 204.205、第38図 241.242、第44図 297~299、第51~55図)

浅い円筒形(現代の灰皿に近い)を呈するものである。規模は径15cm前後を中心に、小さいものは約12cm、大きいものは約18cmを測る。器高は約2.5cmと5cmのものに二分できる。堺焼等の焼台と異なり、底板がある。

成形は円板上に粘土紐を積み上げて、その上端部を押しさえ内傾する平坦面をつくりだす。調整は内外面ともナデである。平坦面には、指またはヘラ状工具を用い、数ヶ所の押しさえや刻み目を施している。

また底部内面には、所有者を示す手印と呼ぶ文字あるいは記号を刻んだものが多い。一・二・七・八・大・田等の手書き文字と判読できないが人名と考えられるもの、×・○・クシ目文様等のクシ書き記号がある。その他、⊖の刻印も見られる。

播鉢と焼台との関係は、播鉢に焼台が溶着したものの、播鉢底部にみられる焼台痕から知ることができる。さらに、播鉢の体部内面下位には播鉢陶片を窯道具に転用した重ね焼の目痕が残っているもの、陶片が溶着したものもあり、重ね焼の状況も把握できる。

<手捏土製品> (第14図 45、第20図 104、第33図 206)

第1・2・4層から各1点ずつ出土しており、手捏土器の形態を呈する。用途は、焼き具合を見るための色見か、あるいは入れ子にして焼く場合の土団子の代用品であろう。

◎ その他

<古銭>

(1) 寛永通宝 (第46図 310~313)

4枚発見しており、いずれも銅銭である。(310)がD-13区の地山直上の検出であり、他はD-12・13区の表土層から出土している。(311)は背に文とあり江戸・亀戸銭(初鑄1668年)、他は背に元とあり大坂・高津銭(初鑄1741年)であろう。

3. 播鉢の形態別分布

下相野窯の物原は、比較的攪乱がなく一定の堆積状況を示しており、遺物の形態変化・順序が求められるものとして、層位的に取り上げた。特に、断面観察用のセクションベルト中（グリッド北面「畦2」及び西面「畦1」の幅1m）のものは断面図を作成したのち、これに合わせて取り上げている。

第2表の各層出土（播鉢）統計処理の数字は、ここから抽出した口縁部の数量であり、総固体数は22,808点である。

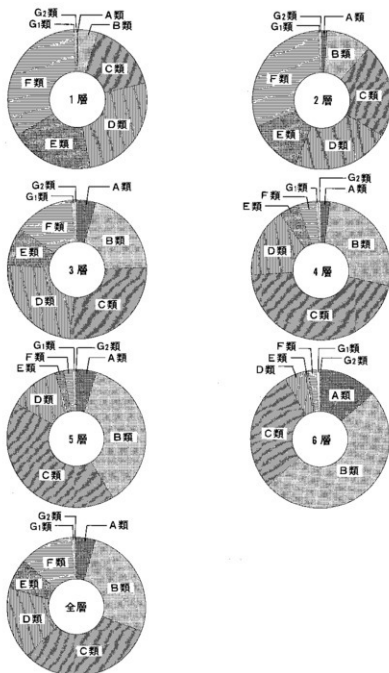
まず垂直分布として、層位別に各層を見ていくと第56図のようになる。そして、各層別に層位を見ると第57図のようになる。これを説明すれば、A類は総数1,061点であり、ほぼ半数が第6層に存在する。B類は総数5,964点で第6層に約1/3が認められ、上層へ順次減ってゆく。C類は総数7,247点と最も多く、第4・5層に半数が集中する。D類は総数3,851点であり、第3層に約1/4が認められこの層を中心に散布がある。E類は総数1,632点であり、第2層に約1/3と多く認められここを中心に散布する。F類は総数2,844点であり、第2層に約2/5が集中し、この層を中心に散布が確認できる。G1類は総数102点であり、第6層が一番多く認められ、第2層と第3層の間に明確な量の違いがある。G2類は総数107点で、第4層に最も多く散布し、第4層と第5層の間に明らかな出土量の差が認められた。

このような事実をふまえると、層位的に下層のものが古いとすれば、大振りのものはA類→B類→C類→D類→E類→F類への変遷が想定でき、小振りのものはG1類がG2類より古くなると言えよう。

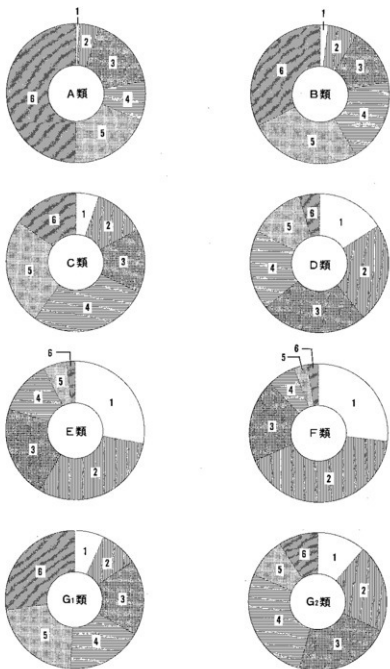
次に、第58～63図はグリッドを単位とした播鉢の平面的な分布である。これからも理解できるように、遺物は一様に分布するわけではなく、窯体横に集中しているのである。

第2表 播鉢形態別出土層別数量一覧表

	1層	2層	3層	4層	5層	6層	計
A類	7	51	176	97	202	528	1,061
B類	107	413	788	1,169	1,545	1,942	5,964
C類	384	855	1,076	2,026	1,799	1,107	7,247
D類	609	893	962	716	486	185	3,851
E類	456	501	350	204	87	34	1,632
F類	765	1,184	546	186	89	74	2,844
G1類	7	9	18	18	22	28	102
G2類	12	22	24	29	10	10	107
計	2,347	3,928	3,940	4,445	4,240	3,908	22,808

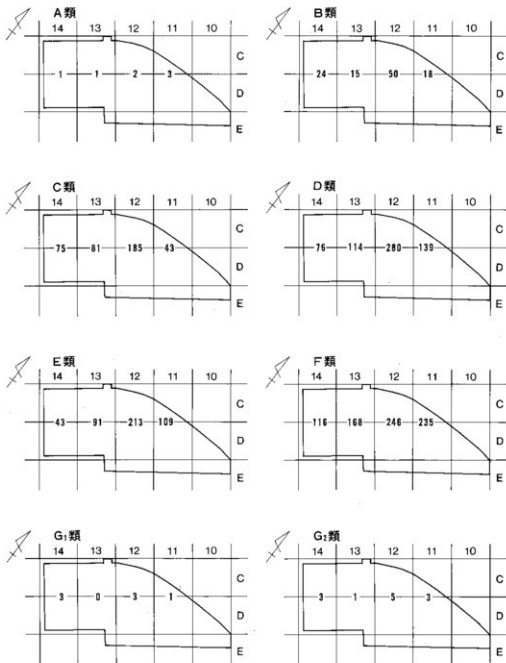


第56圖 推鉢土層別形態分布圖



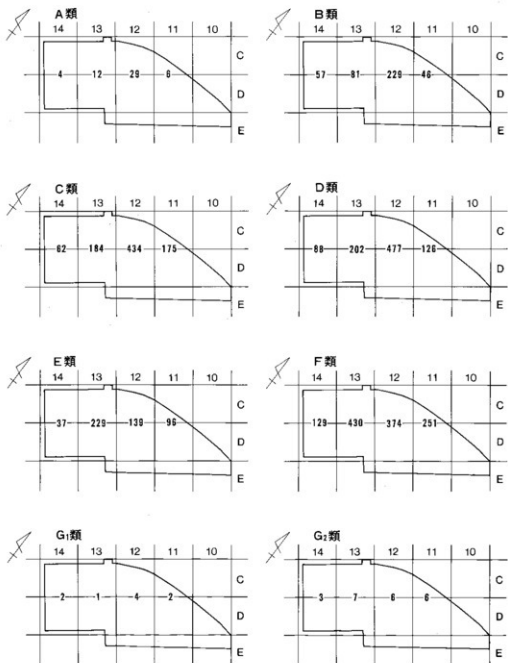
第57圖 擋鉢形態別土層分布圖

第1層



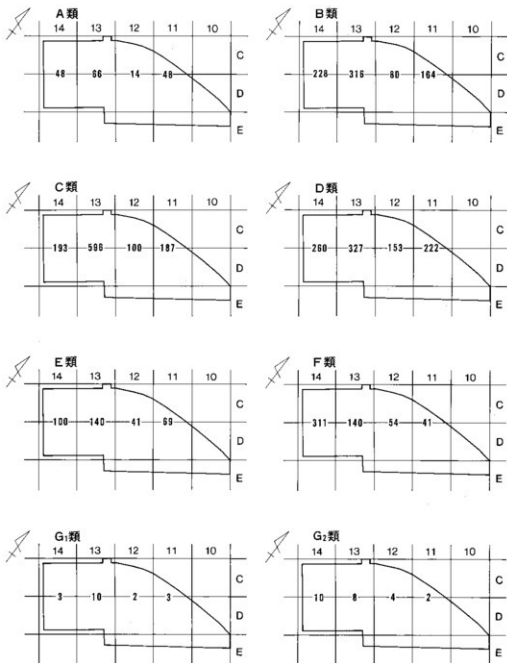
第58圖 擋鉢土層別平面分布圖(1)

第2層



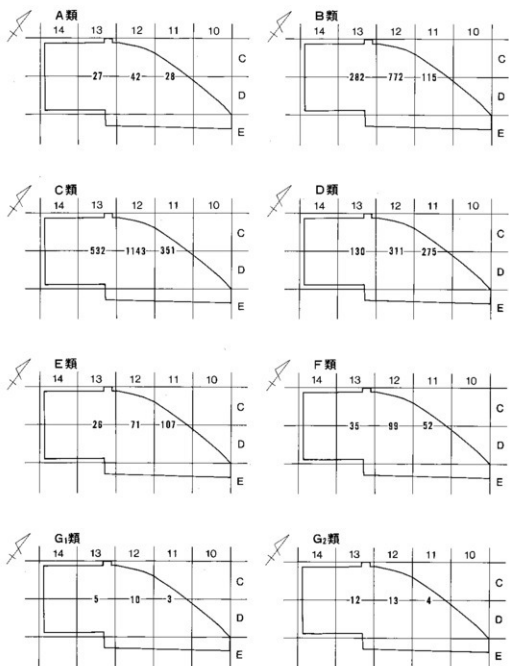
第59圖 擋鉢土層別平面分布圖(2)

第3層



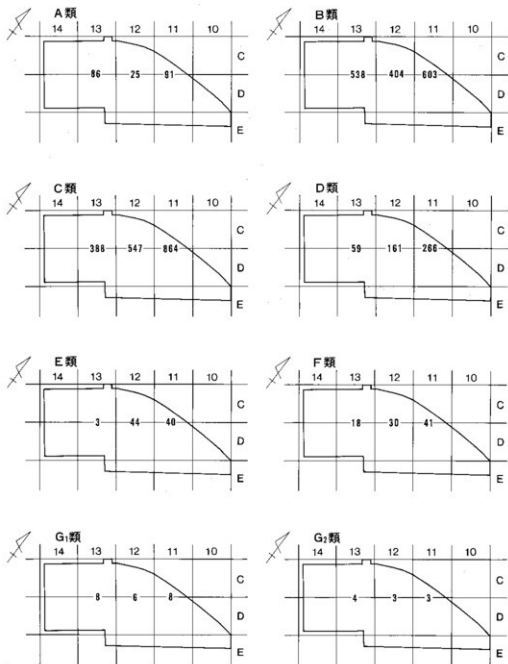
第60圖 擋鉢土層別平面分布圖(3)

第4層



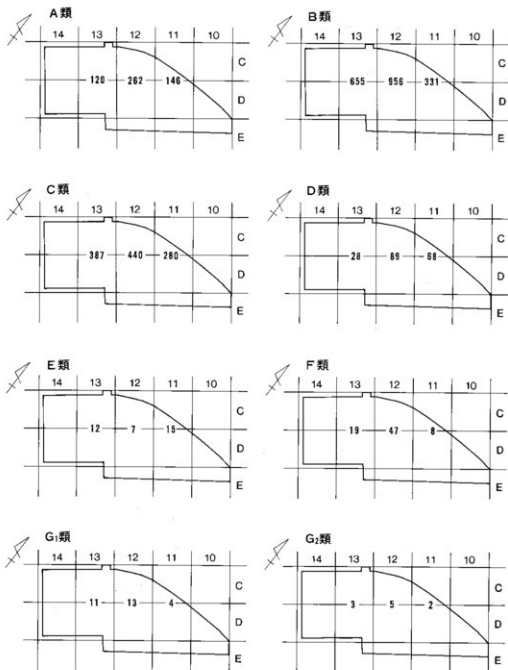
第61圖 擋鉢土層別平面分布圖(4)

第5層



第62圖 擋鉢土層別平面分布圖(5)

第 6 層



第63圖 掘鉢土層別平面分布圖(6)

第3節 検出遺構と出土遺物

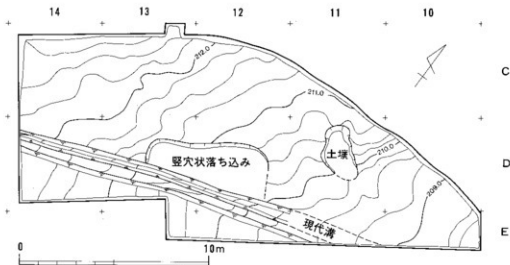
物原関係の遺物包含層を除去した後、黄灰色シルト礫混じり地山層面で、確認調査時に一部発見した土壌と新たに竪穴状の落ち込みの遺構を検出している。竪に付随する遺構と思われるが、現状ではその性格は明らかにしがたい。

1. 土壌 (第65図)

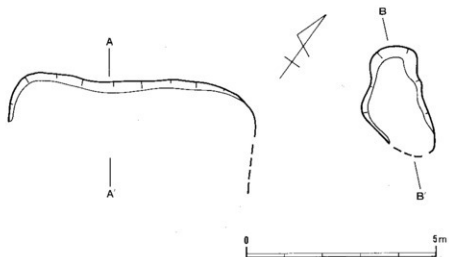
D-11グリッドに検出した最大長約3.00m、最大幅約1.70mの歪な楕円形を呈した遺構である。深さは、残り状況の良好な所で約0.70mを測る。埋土は暗赤褐色土と黒褐色シルト質土で、焼土を多量に含んでいる。出土遺物には、播鉢A・B類がある。

2. 竪穴状落ち込み (第65図)

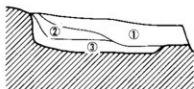
D-12・13グリッドに検出した遺構である。南東側を現代溝と道に破壊され、残存規模は長軸約6.50m、短軸約1.50mの長方形を呈する。最大の深さは約0.35mを測り、一段浅くなって南東に広がっている。埋土は赤褐色土と黄灰色シルト質土で、赤褐色層には多くの焼土を含んでいる。出土遺物は、播鉢C・D類がある。



第64図 遺構配置図

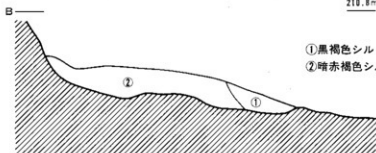


A ————— 211.8m A'



- ① 暗黄色シルト質～中砂
- ② 赤褐色シルト質～粗砂+焼土
- ③ 黄灰色シルト質～粗砂

210.8m B'



- ① 黒褐色シルト質～粗砂+焼土
- ② 暗赤褐色シルト質～粗砂+焼土



第65図 竪穴状落ち込み・土壌平面図及び断面図

第4章 まとめ

近世丹波焼播鉢の型式分類とその編年

調査結果は前述のとおりであり、わずかに物原の一部であったものの、初めて近世丹波焼の窯址に発掘調査が実施されたのである。

このため、登窯の構造規模等は明らかでないが、遺物は大半が重ね焼をする播鉢と焼台で大甕がないことを考えると、窯の高さはきほどなかったと想定してよい。

次に大量の播鉢を包含していた物原は、比較的良好な状況で残存しており、遺物の垂直分布でみたように播鉢A・B・C・D・E・F類、G1・G2類がほぼ層位的に堆積し、新旧関係の把握が可能であった訳である。

その他、播鉢以外の製品も各層に若干存在するが、他の丹波焼窯出土のものに比較すると技術的に稚拙といえる。

最後に、この下相野窯出土の播鉢を中心に消費地の資料を参考として、近世丹波焼播鉢の編年を考えてみよう。(第3表 近世丹波焼播鉢編年表参照)

< I 型式 >

体部が直線的に開いて立ち上がり、口縁部はそのまま切り離した形を呈する。口縁端部と体部が直角をなす。体部内面の播目は4～6本のクシ播が基本であり、底部内面(見込み)の播目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。生産地には、今田町窯尾北窯址と篠山町山内窯址や西脇鹿野窯址等にこの時期のものがみられる。消費地でいえば、兵庫篠山^①、姫路城^②、明石城^③、明石城^④、明石城^⑤等であり、明石城では土壌内一括資料として肥前系陶磁器と共存している。これらの資料から、年代は17世紀初頭と考える。

なお、中世からの流れのなかで捉えられるこれと同形態の播鉢で、口縁部内面に凹線を持ち体部内面の播目がへら播の一本単位のもので、この時期では共存したと考えられる。

< II 型式 >

下相野窯址のA類にあたる。I型式と大差ないが、口縁端部が若干厚くなっている。この段階までが、無釉の焼き締めであろう。体部内面の播目は、4～6本のクシ播が基本である。底部内面(見込み)の播目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には京都府宮津^⑥、東京都東京大学御殿下記念館^⑦、大阪府能勢町内の遺跡^⑧や東除川(亀井遺跡)^⑨等がある。年代は、共存資料から17世紀前葉と推定する。

<III型式>

下相野窯址のB類にあたる。口縁端部と体部が少し鈍角をなし、II型式の口縁端部が若干上方に拡がる。この段階前後で泥土(赤土部種?)が塗布されるようである。体部内面の描目は、4～6本のクシ描が基本である。底部内面(見込み)の描目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県伊丹町遺跡^⑧と大阪府堺環濠漆都市遺跡等がある。両者とも土壌内の出土で肥前系陶磁器と共存しており、この資料から年代はII型式に続く17世紀前葉と推定している。

<IV型式>

下相野窯址のC類にあたる。口縁端部を上下に拡張させ、その断面形が正三角形を呈する。体部内面の描目は、6～8本のクシ描が基本である。底部内面(見込み)の描目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県姫路城武家屋敷遺跡と京都府宮津城、大阪府堺環濠漆都市遺跡、東京都東京大学御殿下記念館地点等がある。これらの資料から、年代は17世紀中葉と推定できよう。

また、小振りの描鉢である下相野窯址G1類がこの時期前後に伴うものと考えている。

なお、文献をみると承応3年(1654)には登窯の経営を請負う窯座制も始まっている。

<V型式>

下相野窯址のD類にあたる。口縁端部を上方に拡張させ、その断面形が二等辺三角形を呈する。体部内面の描目は、6～8本のクシ描が基本である。底部内面(見込み)の描目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。生産地には今田町窯屋北窯址にこの時期のものが見られる。消費地では兵庫県伊丹町遺跡と大阪府堺環濠漆都市遺跡や東除川(亀井遺跡)、東京都白鷺遺跡等がある。これらの資料から、年代は17世紀後葉と推定したい。

なお、描鉢が大量に生産された時代の文献からの傍証として、元禄9年(1696)には大坂の問屋に、丹波描鉢問屋がみられるのである。


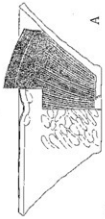
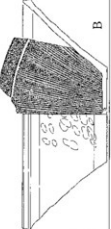




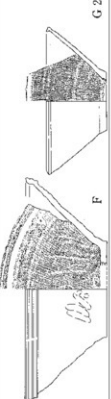



<VI型式>

下相野窯址D類の拡張した口縁端部を外方にナデ、内面に鈍い稜をもたせる。体部内面の描目は、6～8本のクシ描が基本である。底部内面(見込み)の描目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県伊丹町遺跡と大阪府東除川(亀井遺跡)等がある。これらの資料から考えて、年代はV型式に続く17世紀後葉と推定している。

<VII型式>

下相野窯址のE類にあたる。直線的に外傾した体部を先端で水平に伸ばし後、口縁部を直立させ、幅広い縁帯を受け口状に付ける。体部内面の描目は、9～12本のクシ描が基本である。

表3 近世丹波焼埴土器年表

型式	年代	描	鉢	1990 松澤	1988 長谷川	1985 広瀬
I	17初		西福院野窯			
II	17前		A	II類 16末-17初	IIA2 16末-17中	IIA 17第1
III			B			
IV			C G1			
V	17後		D	III類 17初-1期	IIB1b 18前-中	IIB 17第2
VI			D			
VII	18前		E	IV類 17期中以後	IIB2a 18中-後	IIV 17第4
VIII	18中		F G2			
IX	18後		H			IVA 18前
X			伊丹御町			
XI	19 前~中		明石城			

底部内面（見込み）の播目に+あるいは×をつけた後、外周に円を描くことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県姫路城武家屋敷遺跡と伊丹郷町遺跡、大阪府東除川（亀井遺跡）等がある。三田市高川1号古墳では、古墳の再利用時の遺物として出土している。これらの資料から考えて、年代は18世紀前葉と推測しており、ここにひとつの製作上の画期をみる。

なお、文献では正徳年間にも大坂の間屋に、丹波播鉢間屋^⑧がみられるのである。

<Ⅶ型式>

下相野窯址のF類にあたる。E類と同様の口縁形態が若干長くなり、外面の凸凹が強く凹線文風になる。体部内面の播目は、9～12本のクシ播が基本である。底部内面（見込み）の播目に—あるいは+をつけた後、外周に円を描くものが多いことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県姫路城武家屋敷遺跡と伊丹郷町遺跡、大阪府東除川（亀井遺跡）や堺環濠都市遺跡等がある。これらの資料から、年代は18世紀中葉と推測している。

また、小振りの播鉢である下相野窯址G2類がこの時期前後に伴うものと考えている。

<Ⅷ型式>

下相野窯址のH類にあたる。F類と同様の口縁部で、体部下に貼り付け高台を持つ。体部内面の播目は、9～12本のクシ播が基本である。底部内面（見込み）の播目に—あるいは+をつけた後、外周に円を描くものが多いことと、体部外面に残るユビオサエ痕が特徴である。消費地には兵庫県丹南町初田館跡^⑨がある。この資料から、年代はⅦ型式に続く18世紀中葉と推測している。

<Ⅷ型式>

底部には高台を持ち、直線的に外傾した体部に直立気味の口縁部が付く。口縁端部は平坦面を作り、外面は凹線文を施す。体部内面の播目は、11～12本のクシ播が基本である。底部内面（見込み）の播目に—をつけた後、外周に円を描くものが多い。体部内面には、新たに鉄軸の使用が始まり、前型式まで体部外面にあったユビオサエ痕は回転ナデにより、みられなくなる。また、重ね焼する時の窯道具も陶片ではなくなっている。消費地である兵庫県伊丹郷町遺跡^⑩の資料から、年代は18世紀後葉と推測しており、ここにもひとつの製作上の画期があると考えられる。

<Ⅷ型式>

底部には高台を持ち、直線的に外傾した体部に内湾気味の口縁部が付く。口縁端部はT字状に拡がり、上面は浅い凹線文を施す。体部内面の播目は、11～12本のクシ播が基本である。底部内面（見込み）の播目は同心円または渦巻き状になり、体部内外面とも鉄軸が施される。消費地である兵庫県明石城武家屋敷遺跡^⑪の資料から、年代は19世紀前葉～中葉と推測している。

丹波焼播鉢は、17世紀前葉をもって突如畿内はもとより江戸の町まで広汎に流通していく。この背景には、生産地における連房式登窯の導入と、消費地での自由な商品流通があげられよ

う。そして、備前焼等との競合の後、18世紀中葉には凋落が始まっているのである。

こうした中、下相野窯は丹波播鉢全盛期の17世紀前葉から18世紀中葉かけて操業したものと考えられる。なお、各型式の年代は物原の出土状況にもみられるように、盛期を示すものであって、当然その前後に及ぶものと考ええる。

- 註① 松澤 修 「信楽と丹波」『紀要』第3号 財団法人滋賀県文化財保護協会 1990
- ② 大槻 伸 「丹波とその周辺」『日本やきもの集成』7 平凡社 1981
- ③ 岸本一郎 「周辺の窯業遺跡」『播磨・緑風台窯址』西脇市文化財調査報告1 1983
- ④ 秋枝 芳・山本博利「特別史跡姫路城城跡（白鷺中学）」『兵庫県埋蔵文化財調査年報』昭和59年度 1987
- ⑤ 明石市教育委員会調査 1989年 種原昭嘉氏の御教示による。
- ⑥ 荻野繁春 「『財産目録』に顔を出さない焼物」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集 1990
- ⑦ 鈴木裕子「東京大学御殿下記念館地点出土の陶磁器」『江戸の陶磁器』江戸遺跡研究会 第三回大会・発表要旨 江戸遺跡研究会 1990
- ⑧ 広瀬和雄 「丹波播鉢をめぐる二、三の問題」『能勢町における埋蔵文化財の調査』I 能勢埋蔵文化財研究会 1985
- ⑨ 広瀬和雄 「陶器」『亀井』その2 近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 大阪府教育委員会 1986
- ⑩ 白神典之・増田達彦「堺における近世の陶磁器と土器について」『関西近世考古学研究会』 関西近世考古学研究会 1991
- ⑪ 註②大槻論文
- ⑫ 「摂州難波丸」上巻畢『日本國花萬葉記』卷第六之二
- ⑬ 「正徳年間ノ大坂問屋」『波速叢書』第九
- ⑭ 兵庫県教育委員会調査資料 岡崎正雄氏の御教示による。
- ⑮ 兵庫県教育委員会調査資料 村上泰樹氏の御教示による。
- ⑯ 兵庫県教育委員会調査資料 山下史朗氏の御教示による。

参考文献

1. 載内 清 1955 「丹波立杭窯の研究」
2. 杉本捷雄 1969 「改定丹波の古窯」兵庫県陶芸館
3. 橋崎彰一 1977 「丹波」日本陶磁全集11
4. 長谷川真 1988 「丹波系播鉢について」『中近世土器の基礎研究』IV 日本中世土器研究会



凶

版



調査地区遠景(北東から)



調査地区近景(南から)



調査地区全景と物原(東から)



竪穴状落ち込み(南東から)



土壇(南東から)



同上城断面(南から)



土層堆積(南から)



土層堆積(南から)

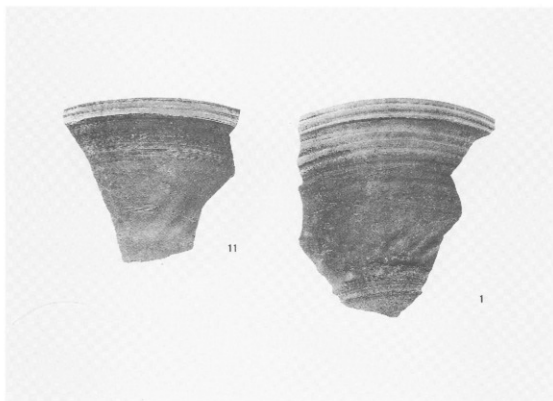
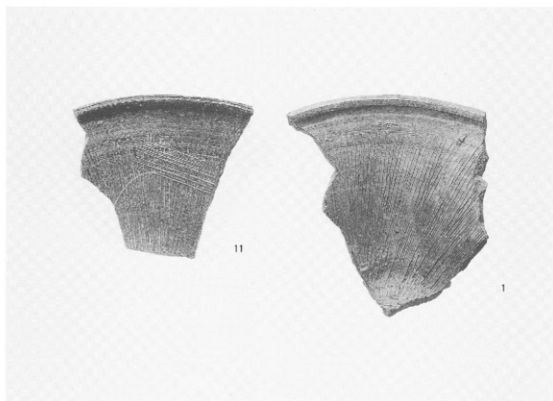


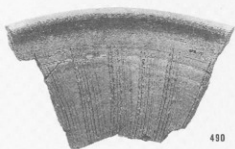
土層堆積(南から)

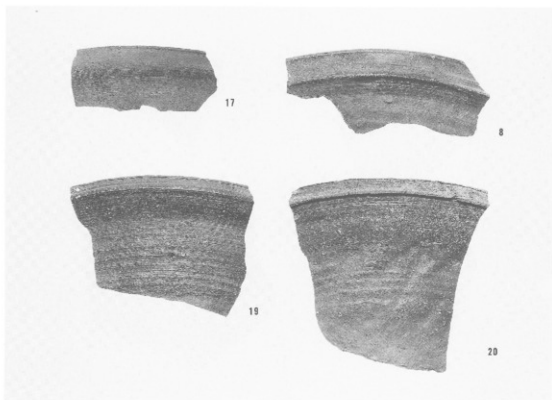
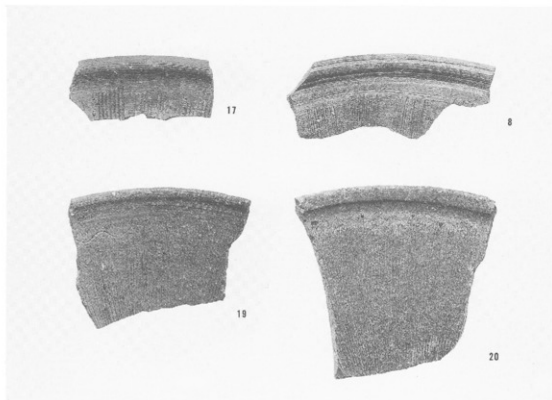


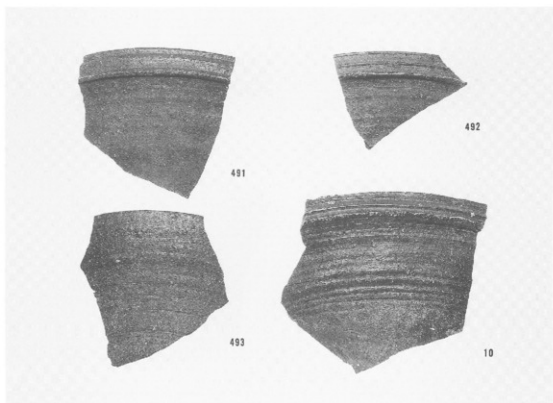
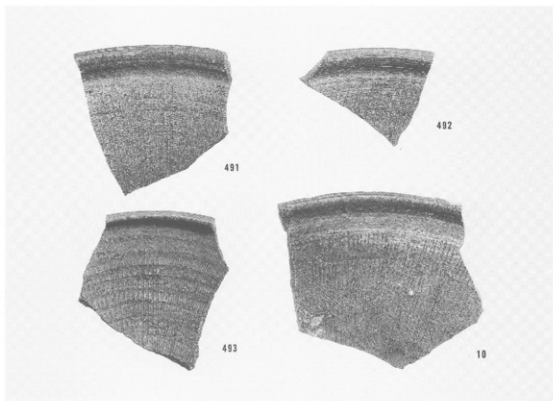
調査地区と平野部(南西から)

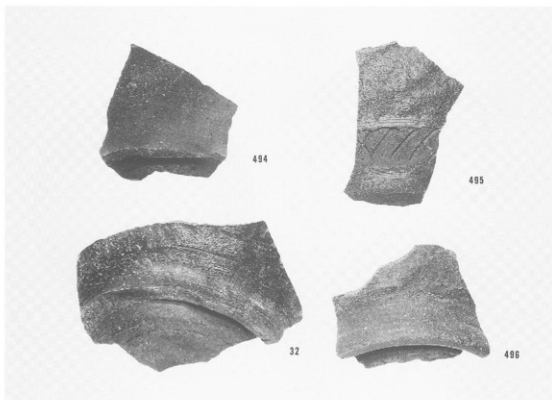
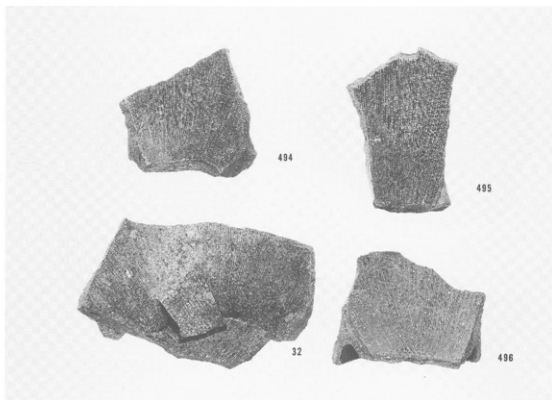


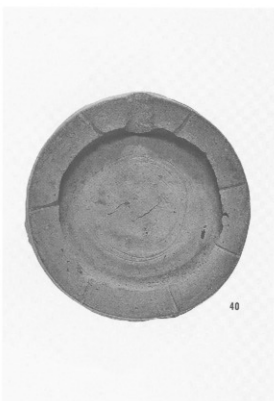
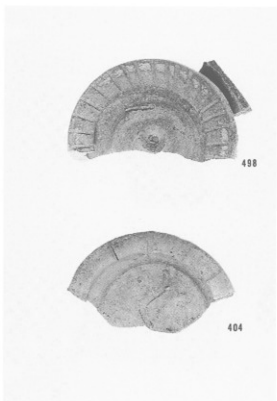
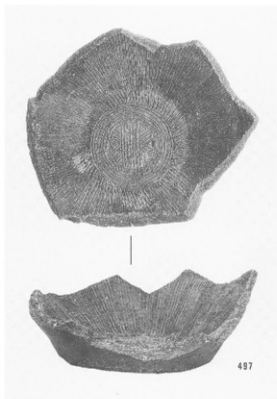


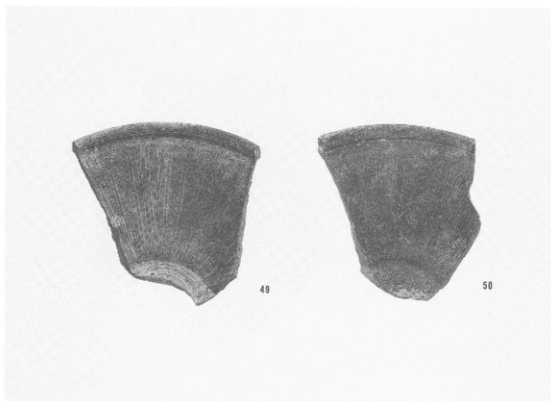


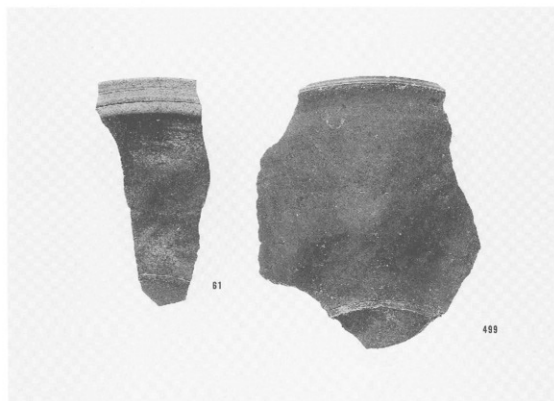
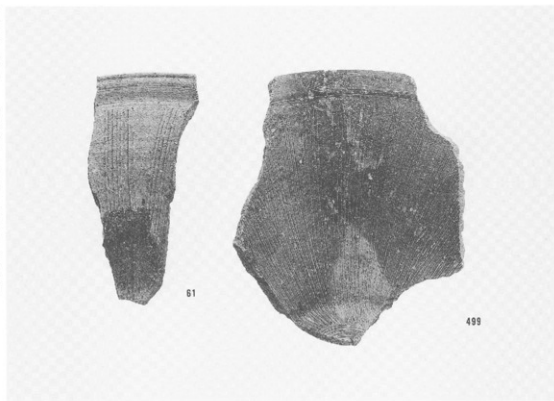


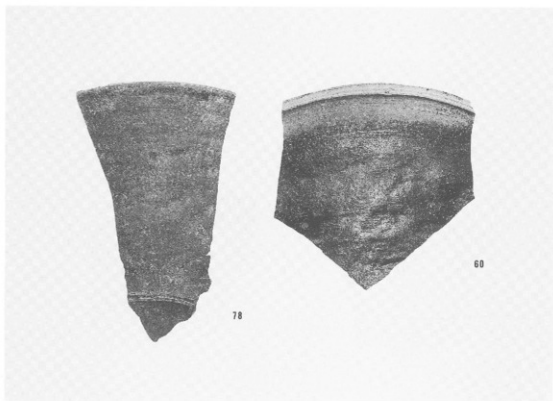
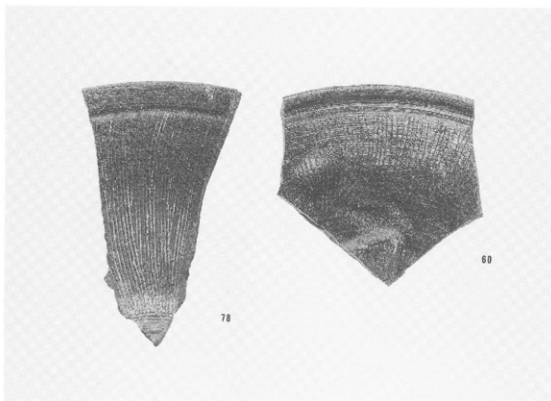


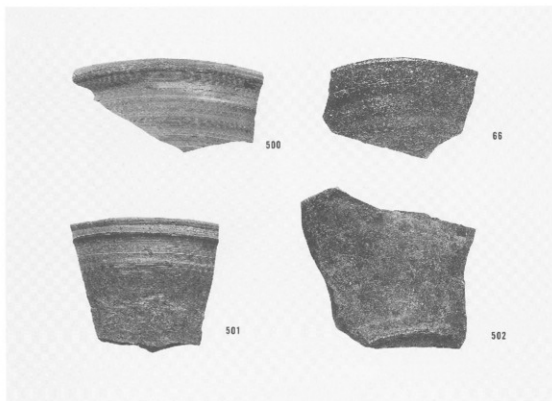
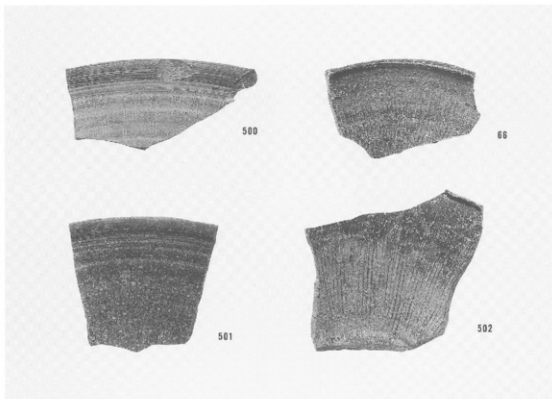


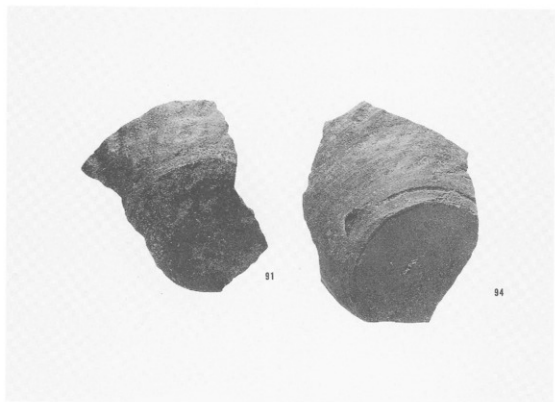
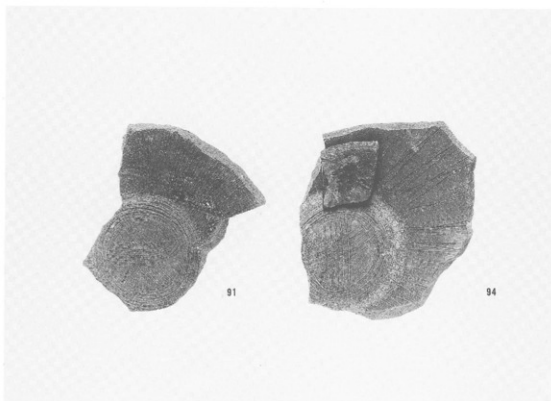






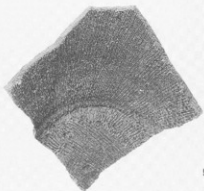








80



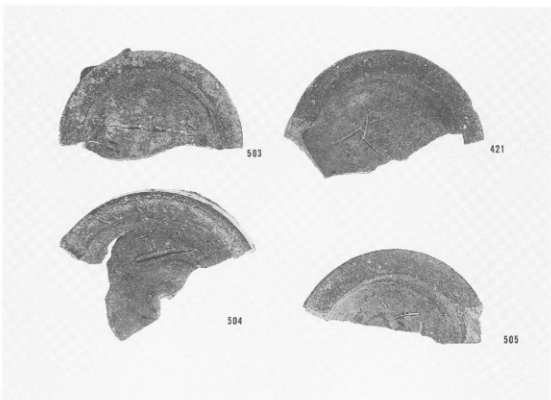
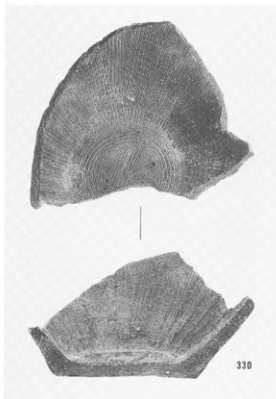
90



80



90

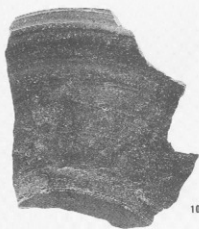




106



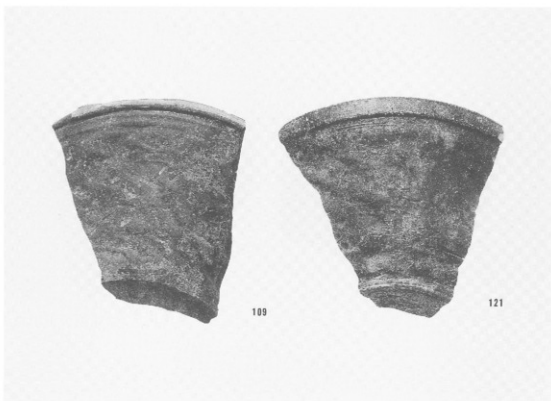
107

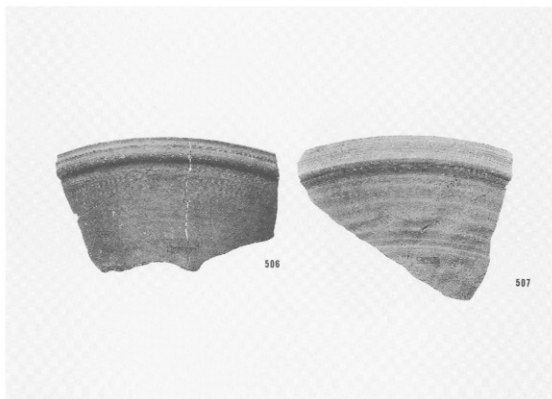
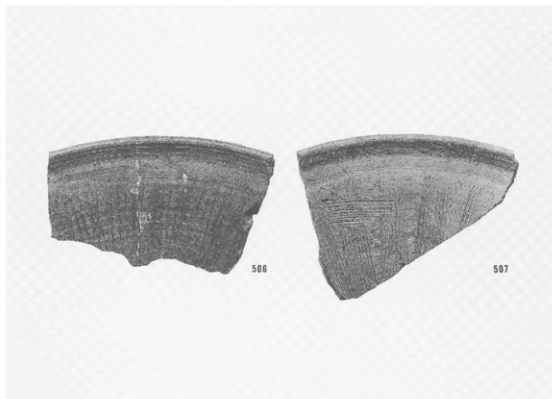


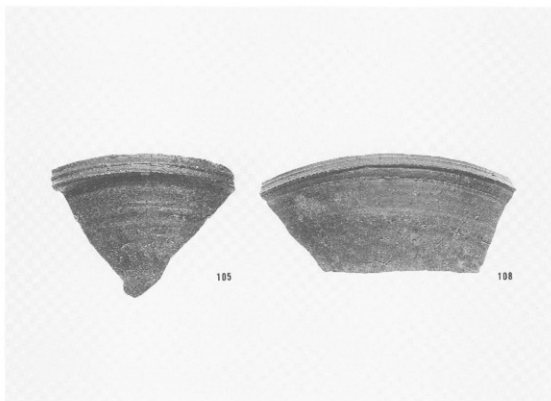
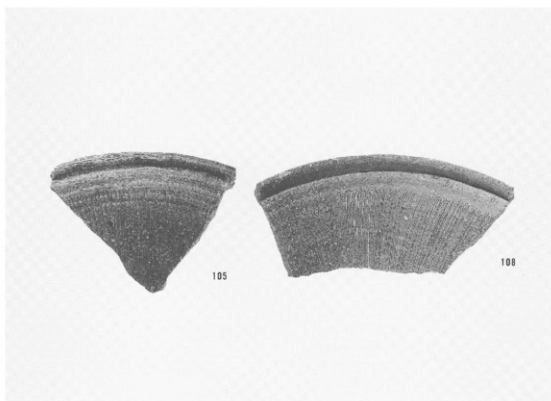
106

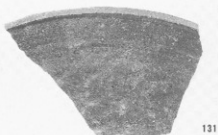
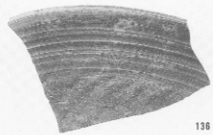
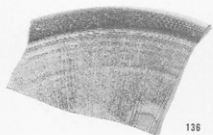


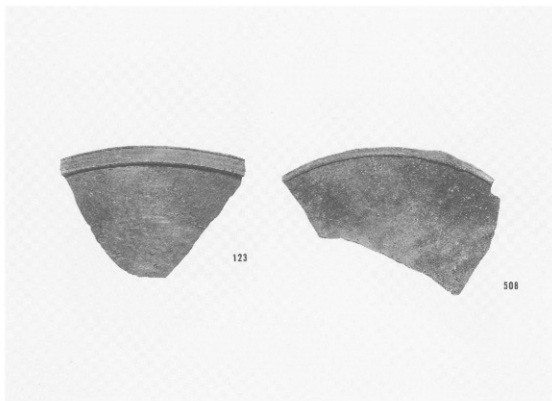
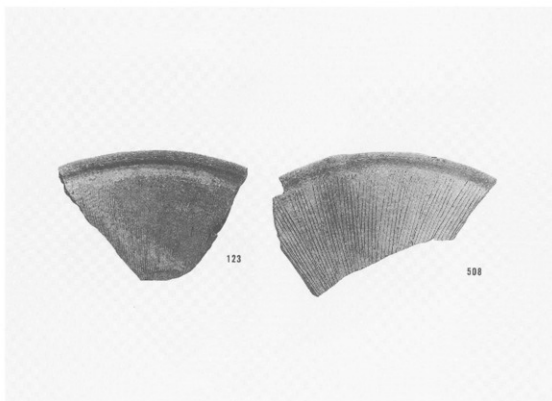
107

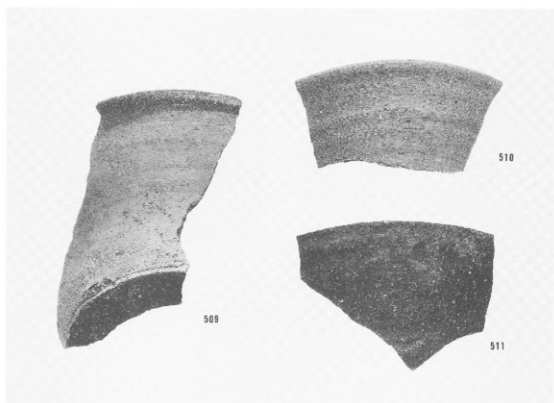
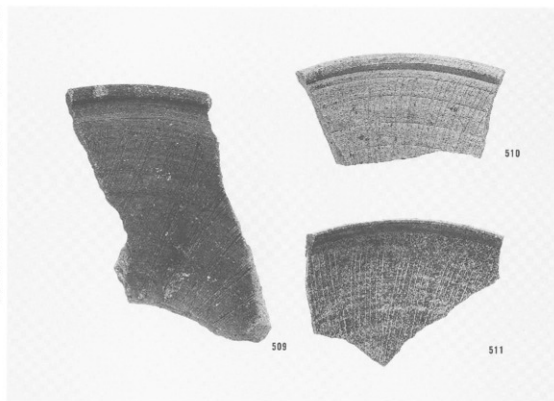


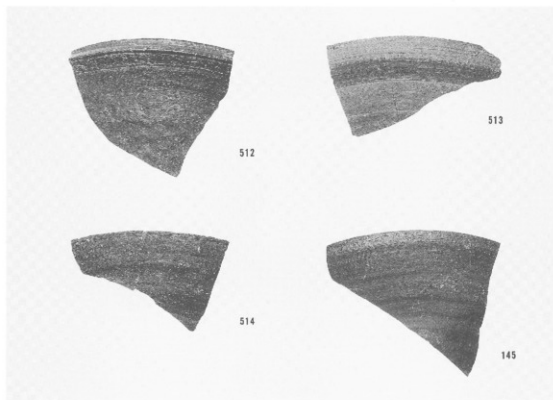
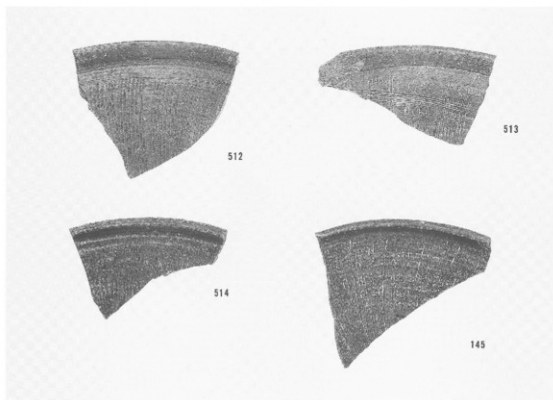


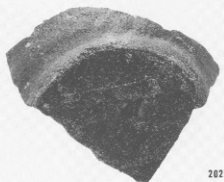


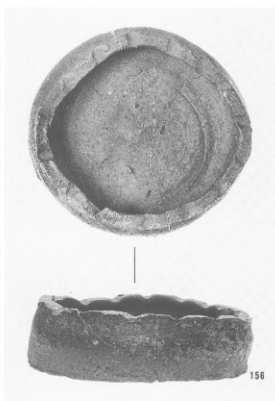
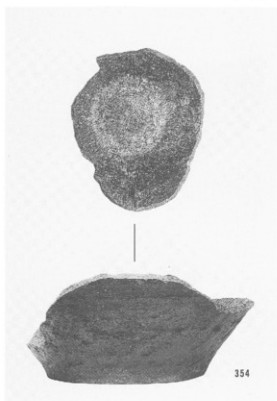
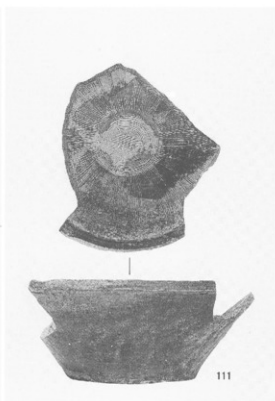


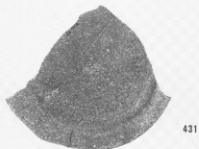


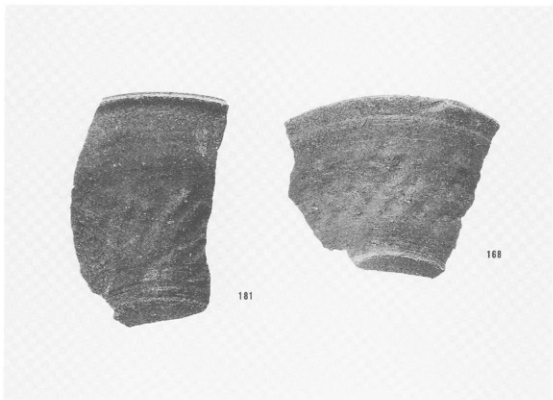
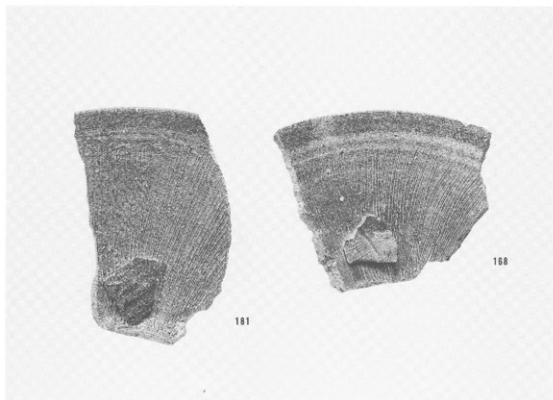




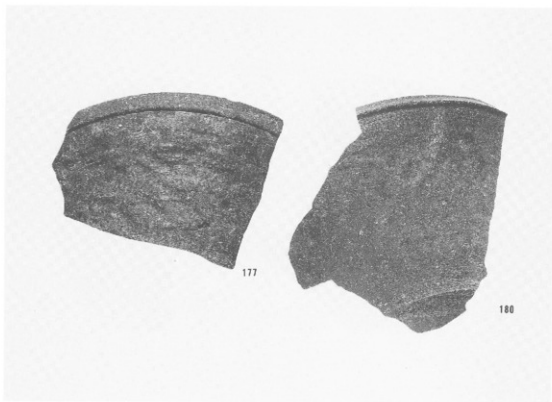


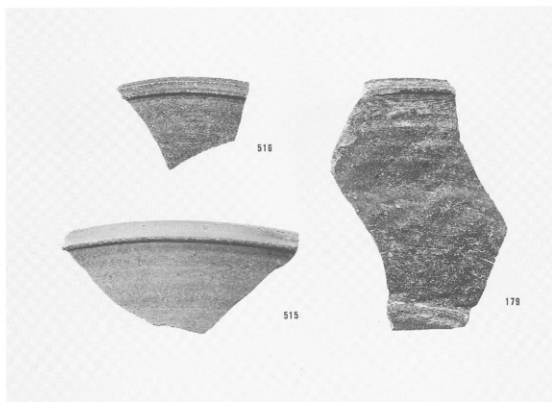
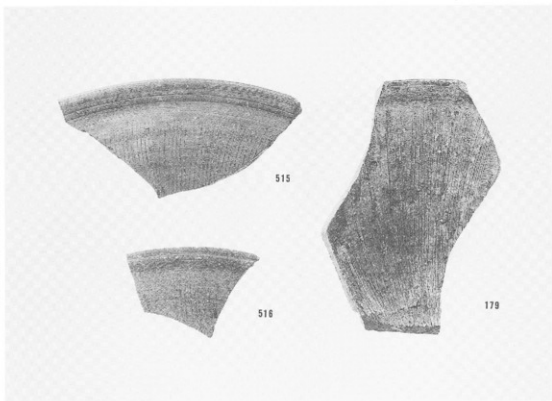


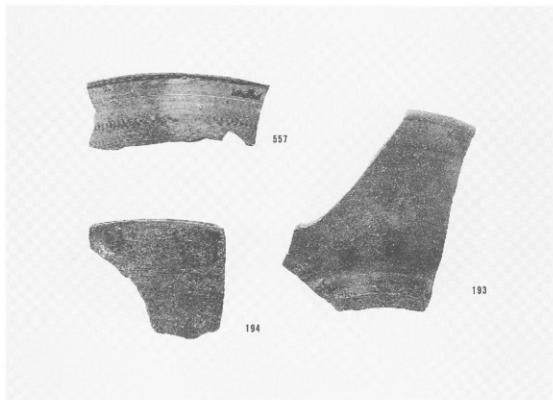
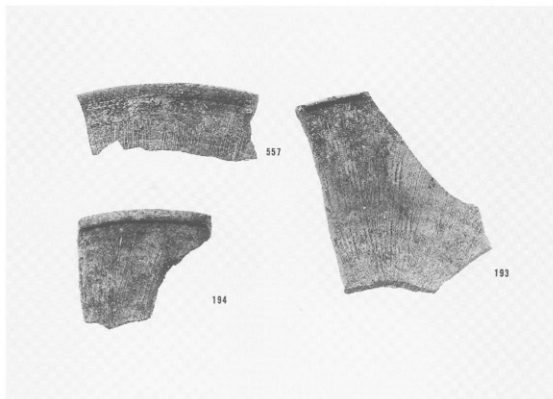








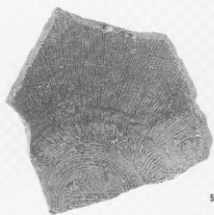








517



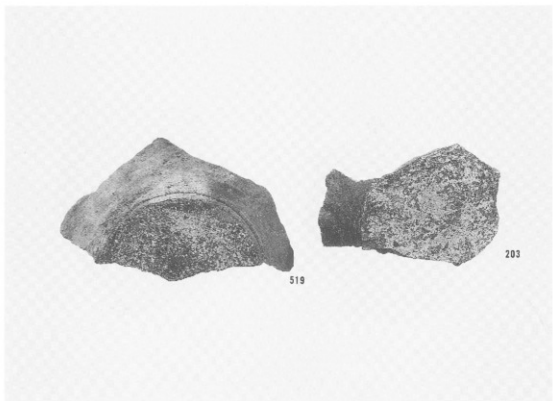
518

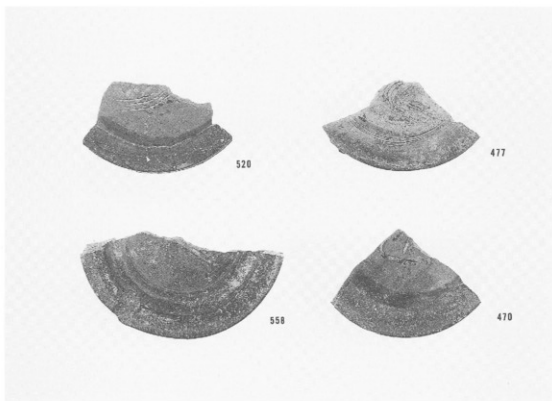
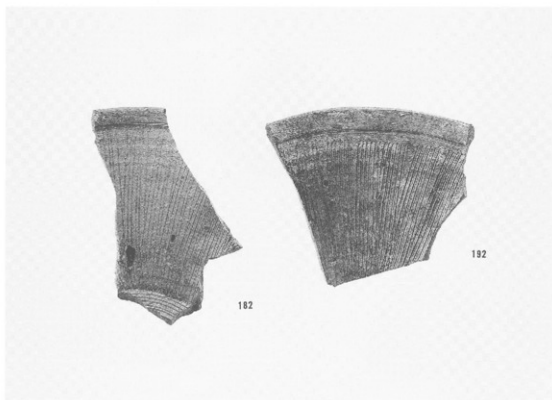


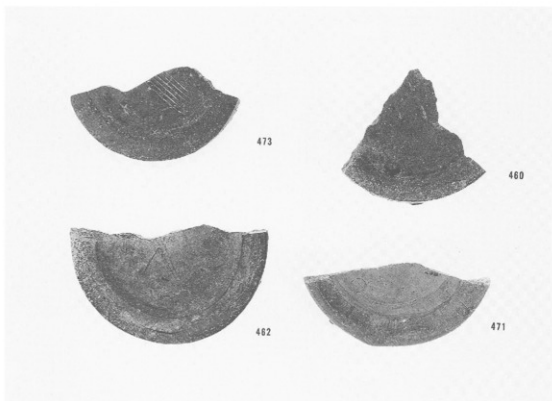
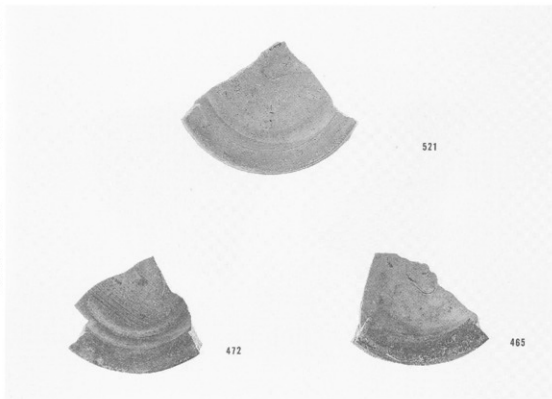
517



518

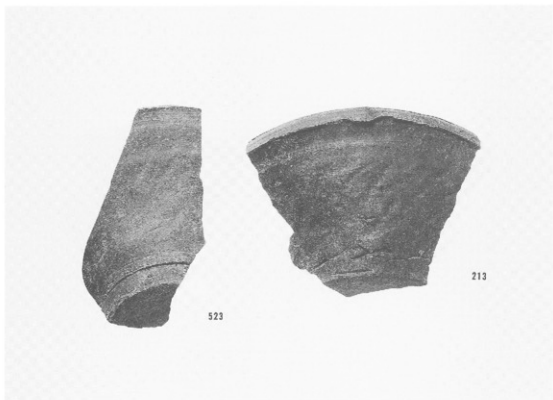
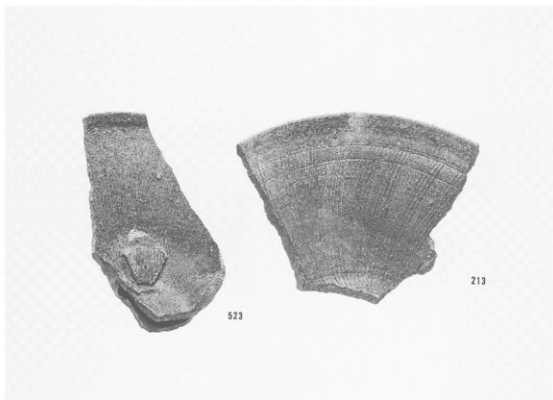














217



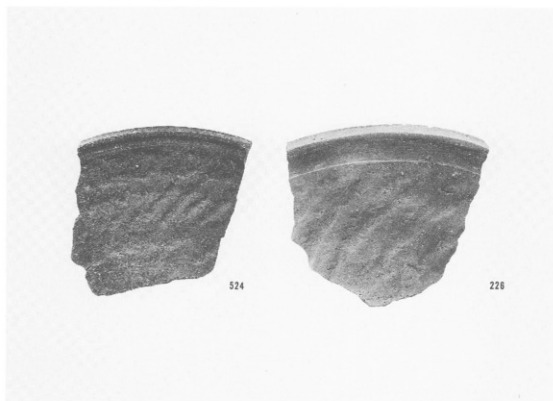
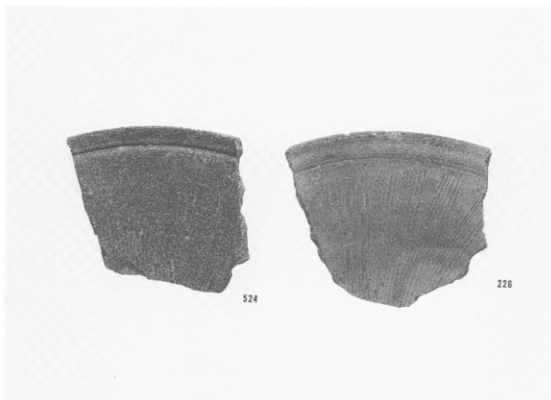
231

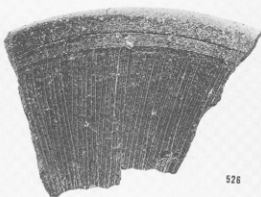


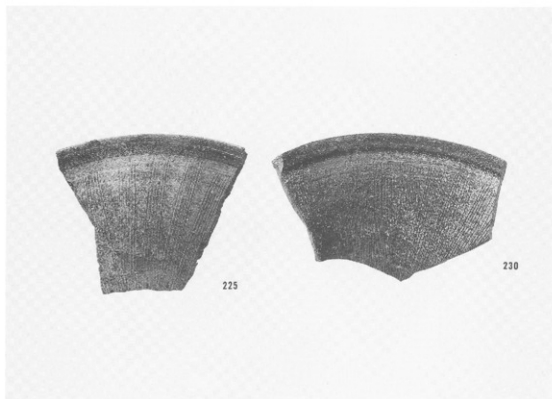
217

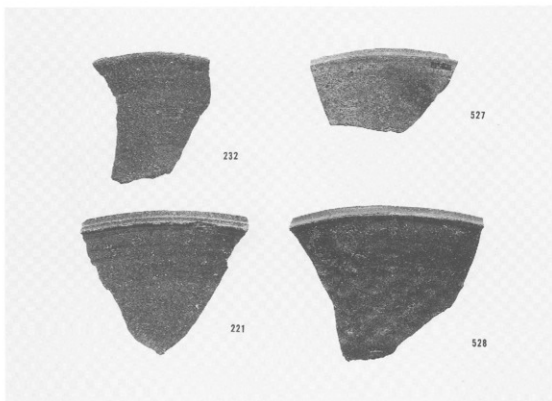
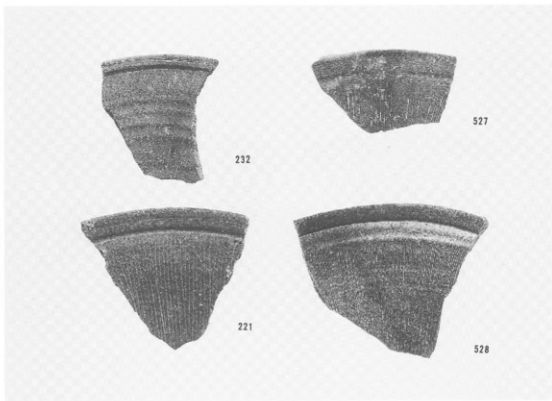


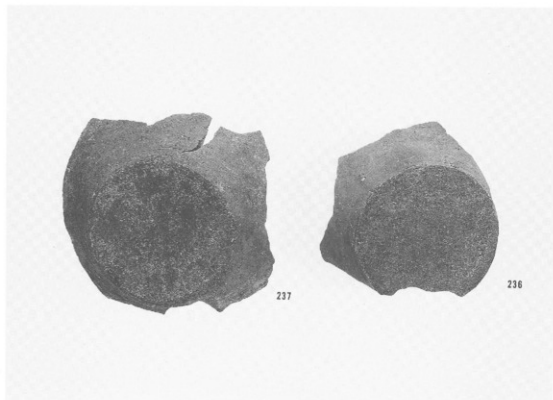
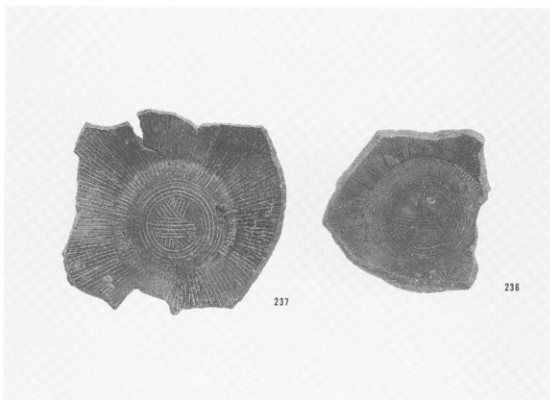
231

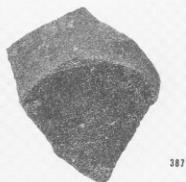


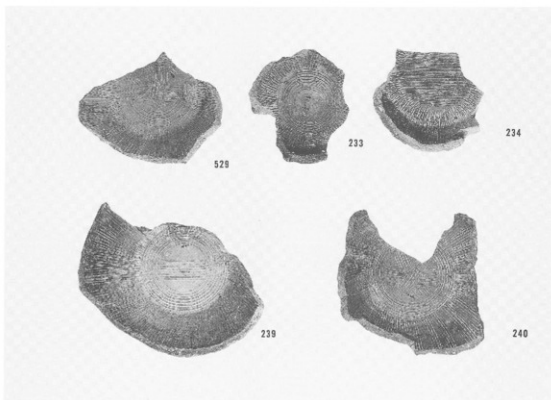


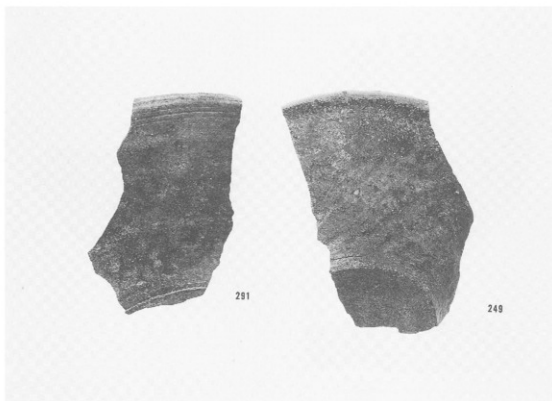
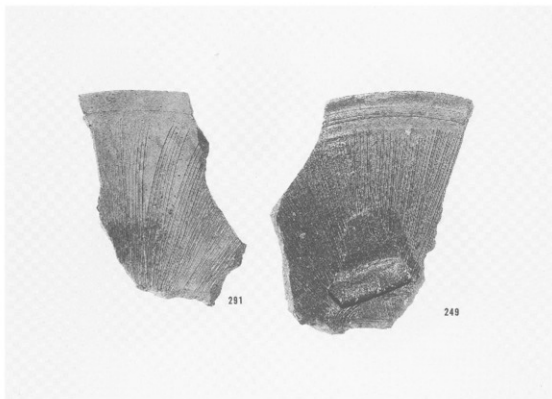


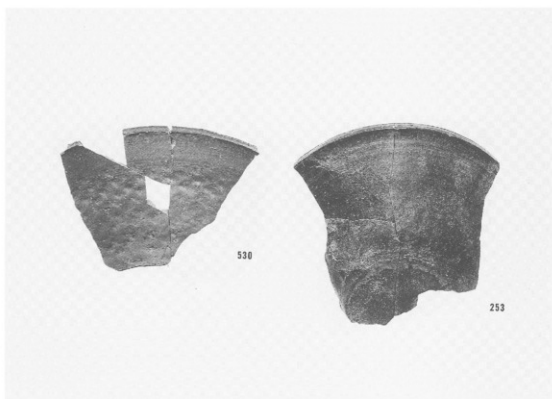
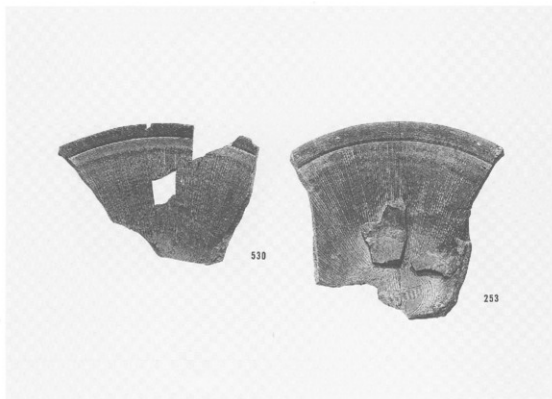




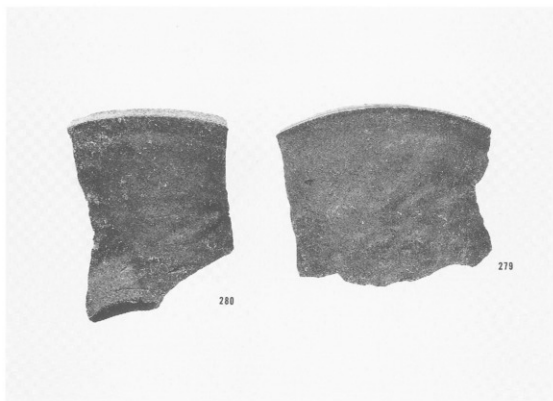


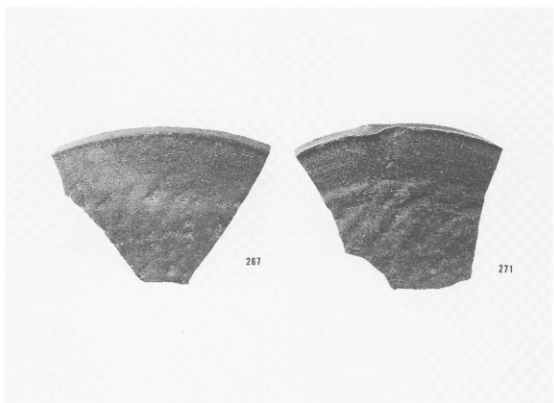
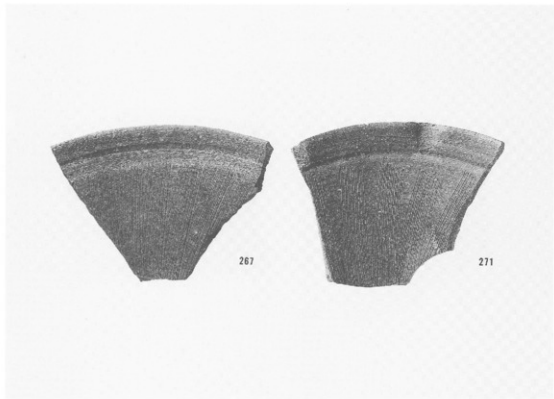


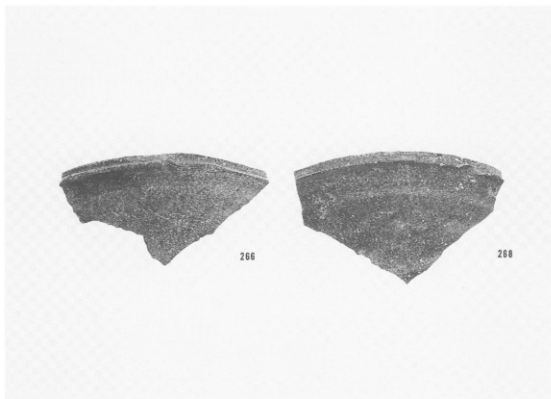
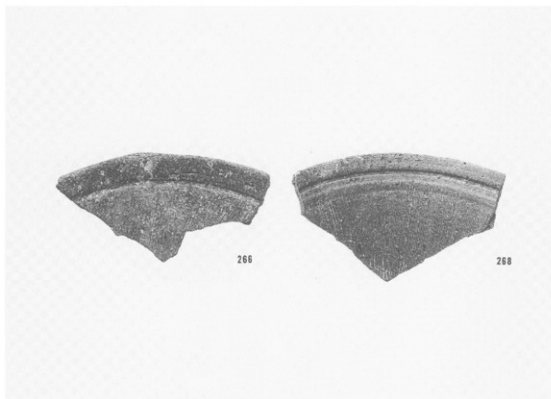




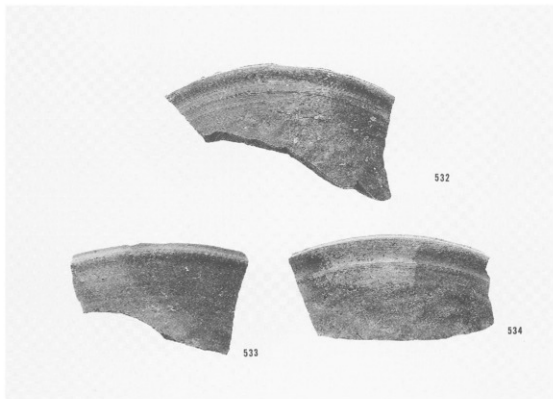
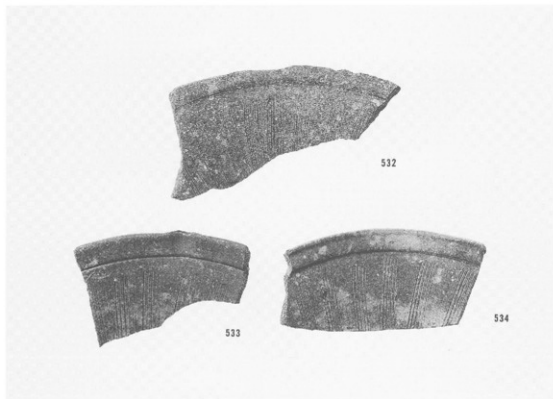


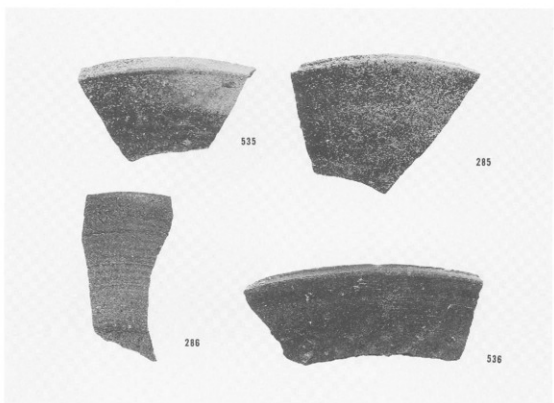
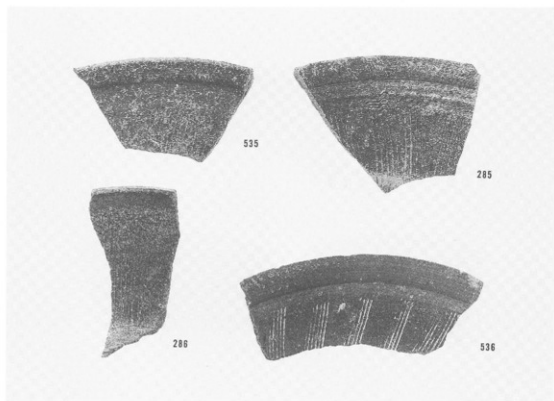
















296



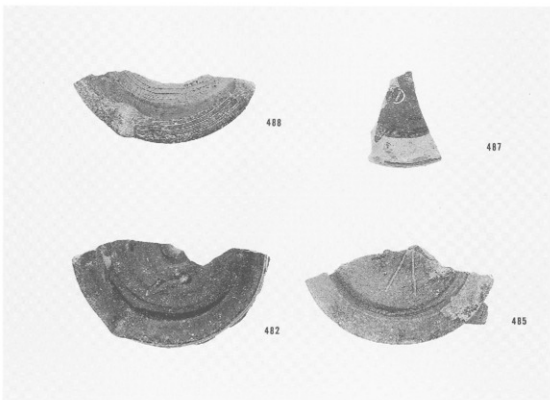
538

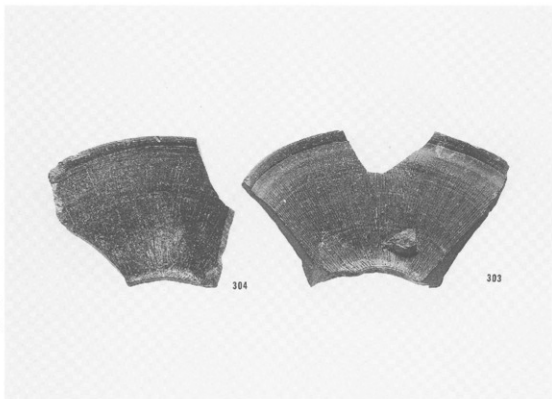


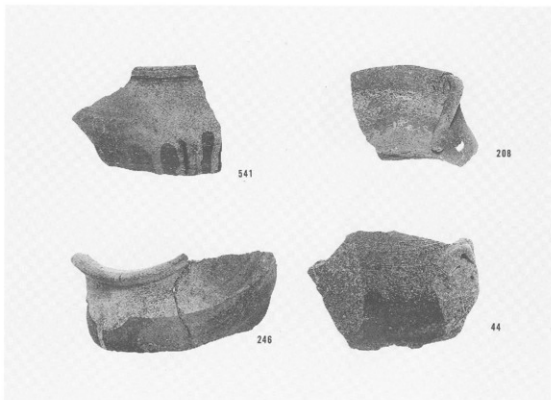
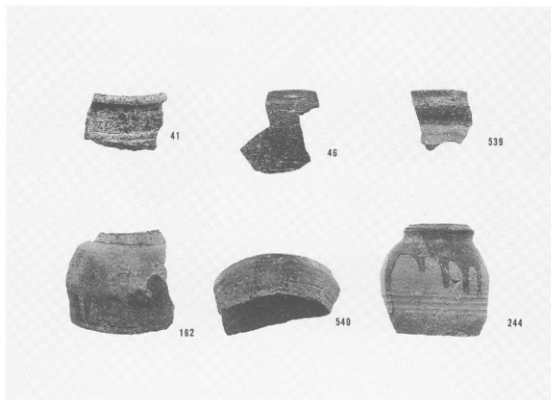
296

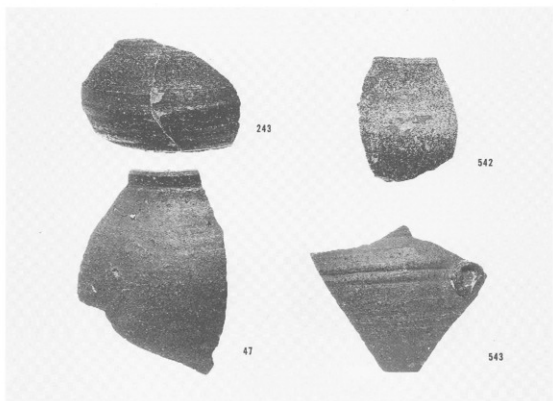
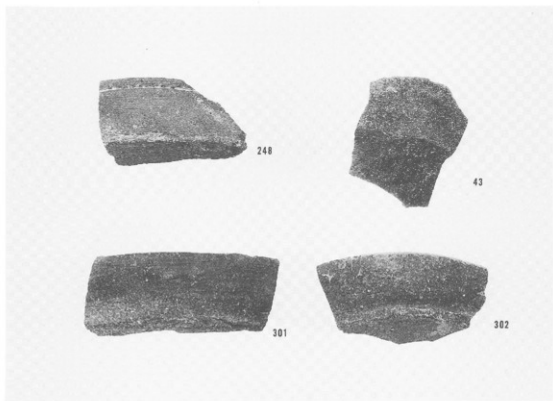


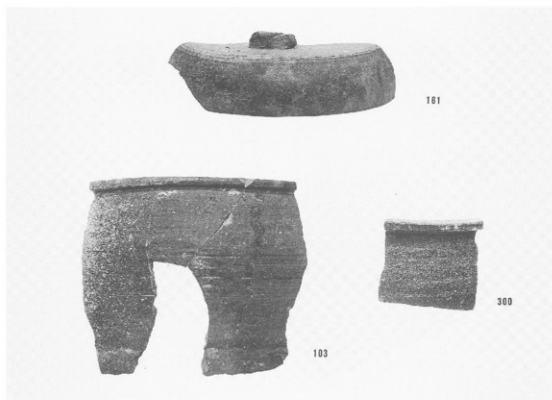
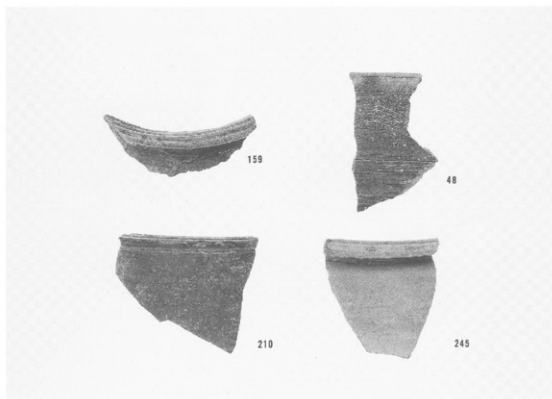
538

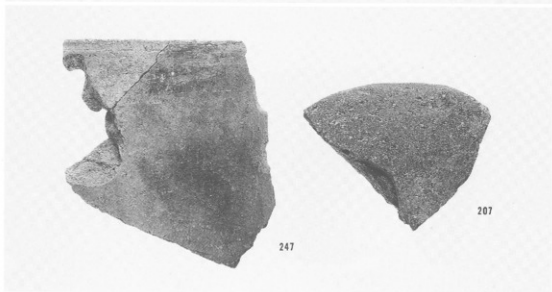
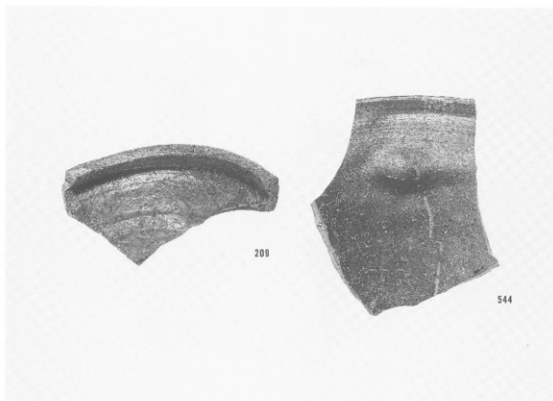


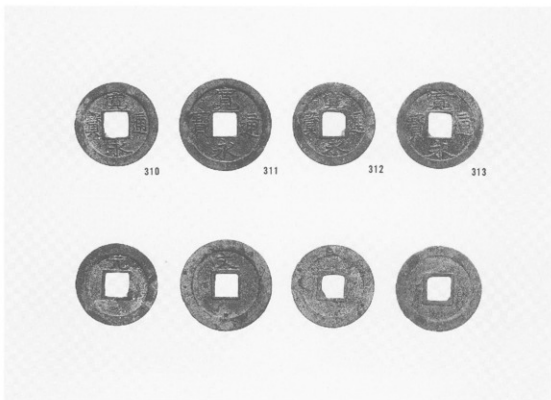
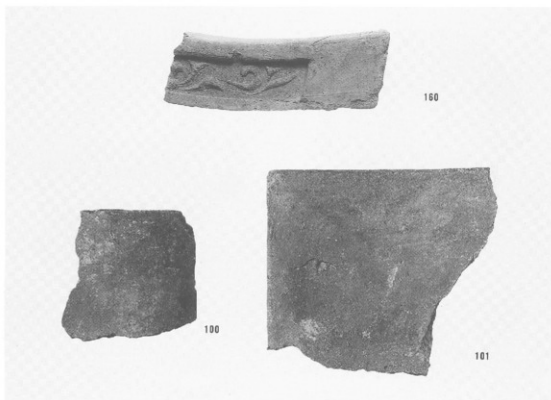




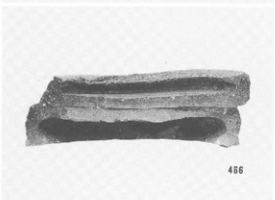
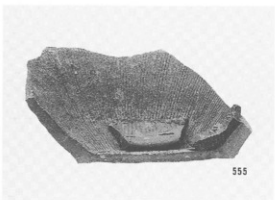












兵庫県文化財調査報告 第107冊

下相野窯址

—— 近畿自動車道舞鶴線建設に伴う

埋蔵文化財調査報告書XVII ——

平成4年3月30日 印刷

平成4年3月31日 発行

- 編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
〒652 神戸市兵庫区荒田町2丁目1-5
TEL.078(531)7011
- 発行 兵庫県教育委員会
〒650 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
- 印刷 菱三印刷
〒652 神戸市兵庫区大開通2丁目2-11
TEL.078(576)3961